

#3

魔法少女

アルフレिका

小説：端音乱希

挿絵：有魚

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

目次

登場人物紹介	P2~P4
本編	P5~P50
あとがき・奥付	P51

登場人物紹介(1)

●魔法少女アルフェリカ／アルフェリカ・フォン・ザ・パーキライド

『星』の異名を持つ、最も古参の魔法少女。
 異世界の王都、セントベルの近衛騎士でもある。
 エビルズアークを追って、単身こちらの世界にやってきた。
 「形状変化」により、ステッキを様々な武器の形に変えて戦う。
 重力操作や、物体の重さを変える魔法が得意。
 ルカンダにより、「性感が100倍になる紋様」と、「絶頂すると魔力を
 遠隔で奪われてしまう紋様」を、身体に刻まれてしまった。

●魔法少女ノーブル・ローズ／早乙女舞華

良家のお嬢様。
 友人を助けたいという強い想いが、異世界から飛来した魔法のステッキと
 彼女を引き合わせた。
 単身エビルズアークと戦い、一度は敵の基地深くまで攻め込み、敵の幹部
 である四魔将との戦いに勝利するも、アーク・デュランを討つには至らな
 かった。
 アルフェリカと共にエビルズアークと戦うも、敗北し、囚われてしまう。



登場人物紹介（2）

●魔法少女シャーリー／小日向沙織

魔法少女プリズム・シャーリーとしてエビルズアークと戦っていたが、敵の策略により人間を憎むようになり、魔法少女エビルズ・シャーリーへと堕ち、エビルズアークの手先になる。

魔法少女ノーブル・ローズと戦い、善の心を取り戻すも、これまで悪に加担していたことを悔やみ、早乙女舞華の屋敷に閉じこもっている。



●アーク・デュラン

「エビルズアーク」の首領。触手の集合体。

アルフェリカ達に追いつめられ、こちらの世界に逃げのびてきた。一時は仮死状態になっていたが、収集した魔力で復活を果たす。



登場人物紹介（3）

<アーク・デュラン配下「四魔将」>

●ルカンダ

女性型で悪魔のような外見をしている。
相手に様々な効果を付与する「紋様」を刻むことができる。

●Dr.バルド

白衣を着た科学者風の男。人々から集めた魔力を用いて、
人工生物である「バイオ兵」や「怪人」を生み出す。

●グリーヴァ

体がスライムで構成された魔法生物。

●レスター

アーク・デュランの娘で触手の集合体。
可愛らしい外見は人間に擬態したもの。



20

「んぎいっ！ んっ、あ……んぎゅうううっ……！」

じゅぶぶ、ぞぶっ！ じゅぐっ！ じゅぐぶっ！

鉄格子で区切られた室内には、私の嬌声とベニスの抽送音が響き続けていた。

「ああううっ！ んっ！ あぎっ！ んっ、あっ、ああああっ、んくうううっ……！」
ベッドの上に仰向けに寝かされた状態で、私は男に犯されている。ずっと目隠しをされているので、今の相手が誰なのか、判別がつかない。

「あぐうううっ……んっ、くあう、あああっ……ひうっ！ んっ、んあああっ……！」

長時間に及ぶ責めにより、私の身体は疲弊しきっていた。手足を鎖で拘束されているが、たとえ鎖がなくても、指一本動かすことはできないだろう。

大量の愛液に包まれたベニスが勢いよく捻じ込まれるたびに、身体の中で快感が弾けている。ルカンダの紋様の効果により、与えられる性感が100倍になっているためだ。

男たちに代わる代わる犯され、快感を刻まれ続けた私の脳には、もはやまともな思考力は残っていない。

私に残っているのは、ただ「気持ちいい」という感覚だけだ。

「あぐううっ、んっ、んんっ!! ぐうううっ、んっ、あっ、んああああううっ……！」

(一体、いつまで続くの……?)

何度犯され、何度絶頂させられ、何度射精されたのか。数えることを放棄してから、もうずいぶん経つ。

舞華にもらったブラウスやスカートはスタスタに裂かれ、むき出しになった素肌には、何度も放たれた男たちの精液がべったりと塗りつけられていた。

「んぐっ、あっ！ く、あうううっ……んっ、んあうううっ、あ、ああ……うあああっ……！」

(舞華……ごめんなさい……)

犯されながら想うのは、心優しき魔法少女のことだった。

彼女と2人でエビルズアークに挑むも、翼にかけられ、四魔将やパイオ兵によって辱められるという結果になってしまった。

何度も絶頂を繰り返し、全ての魔力を失った舞華は、エビルズアークの基地に連れ去られた。魔力を回復できるこの世界の人間の中でも、桁違いの魔力量を持つ彼女は、エビルズアークにとって貴重な魔力源だった。

(今頃舞華も、犯されているのだろうか……)

友のことを想うと、心が締め付けられるように痛む。できれば彼女には、凌辱を受ける苦しみなど、知らないまま置いてほしかった。

「くあっ、んっ、んんっ……あ、あうっ……んあ、ああっ！ やあっ、んっ！ んああああああっ……！」

同じく魔力を全て奪われた私は、ルカンダに協力しているという男たちの慰み者として

下賜され、こうして延々と辱めを受け続けている。魔力を自然に回復できない私は、エビルスアークにとって既に利用価値のない存在なのだ。

「おらあっ！へばってんじゃねえぞ、アルフェリカ様よお！強い魔法少女だったんだろ？もっと根性見せろ！」

「あぎっ!?もうっ、むりっ……あ、んあううっ、あ、くあああ……」

「仕方ねえな。中に出してやる。受け止めろっ！」

「いやああ……中、もう、ダメえっ……！」

じゅっぶ！じゅっぶ！じゅっぶ！じゅっぶ！

男が射精に向けて激しく腰を打ち付けてくる。高速のストロークにより、私の性感も強引に引き上げられていった。

「出るっ！」

「んっ！ああああああああっ……！」

膣内に挿入されているペニスが、熱い液体をまき散らす。奥まで突き入れられた状態での射精により、精液が膣奥を叩いた。

その刺激で、私は絶頂に達する。

「いぐっ……いっ……！んんんんんっ!!」

数えきれないほど味わった感覚。快感が下腹部で弾け、脳天に突き刺さる。全身が温かな心地よさに包まれ、一瞬の痙攣の後に、弛緩する。

「あくっ……あ、ああ……っ、はあ……ううう……はあ、はあ……」

呼吸が荒く、息を吸うたびに、こひゅう、という乾いた音が鳴っていた。体力はとっくに限界で、いつ気を失ってもおかしくない。

いや、実際は何度も気を失っているのだろうが、男たちに絶え間なく責められ、覚醒状態を維持させられていた。

「ふう。次は誰だ？」

私を犯していた男がペニスを引き抜きながら周りの男たちに声をかける。男たちは10人程度の集団のようで、順番に私を犯し続けていた。10人目が私を犯し終える頃には、1人目が体力を回復させており、私は終わらない凌辱のループの中にいた。

しかし、

「俺はもういいや。アルフェリカ様の反応、どんどん悪くなってるし、面白くない」

「そうだな。俺ももう飽きた。誰か犯したい奴がいたら順番譲るぞ」

誰からも返事はない。次に私を犯そうという男はいないようだった。

「じゃあ、終わりにするか」

誰かがそう言う。

(終わり……やっ、終わり……)

私は大きく息を吐いた。無限に続くかと思われた凌辱だったが、これで終わりらしい。彼らが体力を回復させたら、再び犯されることになるかもしれないが、今は一時でも休息の時間を確保できたことが嬉しい。

私は目隠しの内側で目を閉じ、眠りについた――

「それじゃあ、集めていた玩具、順番に試そうぜ」

ぞぶっ！

「んひっ!! ぎいひいひいひいっ!!」

唐突に、何か硬いものが膣内に挿入され、私は悲鳴を上げた。

(何これ……ペニスじゃ、ない……!)

棒状の物体の切端が、ぐりぐりと膣奥に押し当てられる。詳細を確認したくても、目隠しのせいでそれができない。

「ひゅぐい……やめ、ろっ……変なもの、入れるなあ……」

「俺たちが相手できない間は、パイプに相手してもらえ」

「パイプ……?」

「知らないのか? こうやってスイッチを入れると……」

「ヴィイヴィイイン!!」

「きゅひっ!! んひっ!! ぎひいひいひいっ!!」

強烈な刺激に、腰が跳ね上がった。膣内に挿入された棒状の物体が、激しく振動を開始したからだ。

「ああああああっ!! なんて、これ、震え——んんんっ!!」

「そんなに気持ちいいか。じゃあ、ゆっくり堪能させてやるよ」

男はそう言いながら、すり下げられていた私の下着を元の位置に戻す。膣内に挿入された物体が、下着によって覆われる。これにより、男の手による支えがなくても、膣内に挿入された状態を維持されてしまっていた。

「ああああああっ……ダ、ダメえええっ……震えるの、刺激、強くて……んひっ……あ、ああ……イぐっ、イっ、じゃうううっ……!」

凌辱が終わったと思い、気を抜いた直後の強烈な刺激。感度を高められた身体は抵抗する暇もなく、高みへと押し上げられた。

「イっ……く、ううう……イぐううううううっ!!」

大きな絶頂の波。男たちに何度も犯されていた時とは違う種類の刺激に、身体は悦んでしまっている。

「あうううっ……んぎっ、あ、ああ……まだ、震えて……もう、止めろ……」

私はパイプを抜くように言った。しかし、男の行動は私の希望とは異なるものだった。

「これも付けとけ」

むき出しになっている両胸。その乳首の部分に、小さな物体が貼り付けられる。

「んんっ……? 何、付けて……?」

「ローター、スイッチオン!」

「んひっ!? これも、震えてりゅっ……! あ、んあああああっ……!」

乳首に取り付けられた物体も、プルプルと振動を行っている。振動が胸全体に広がり、淡く疼くような快感が生み出された。

「んっ、こんな、んんっ……! あっ、んんっ! あうううううっ……!」

「それじゃあ、俺たち寝てくるから。起きたらまた相手してやるよ」

「んあっ……! 待て……くううううっ……これ、止めろお……!」

男たちの足音が遠ざかっていく。私は乳首と膣内に震える機器を取り付けられたまま、ベッドの上に放置された。

「くうう……あんっ、あ、くああ、あっ、んんんっ……振動、強くて……あっ、あああ

あつ、んっ、あ、んあああああつ……!!」

瞬く間に、性感が高まっていく。感覚が上がり、火照りきった身体では、性感を抑えることができない。

絶頂にたどり着くまで、さほど時間はかからなかった。

「んっ、あ、ああ、あああああつ……!! ぐりゅっ、また、来て……あつ! んんっ!! うあああああつ! イくうっ! んんんんんんっ!!」

びくん! びくん!

鎖で拘束された身体が跳ねる。

「あ……ううう……振動、止まらない……あ、ああ……ああああ……」

私はその後も、振動する器具にイカされ続けた。

ウィイウィイイン!!

「んあう、んっ、ぐっ、あつ、くあああああつ……!! ダメっ、ひぐっ! んっ!! イくううう……!!」

ウィンウィンウィンウィン……

「ぐうううう……お腹の中も、胸も、震え、止まらなくて……あああつ……また気持ちよくなって……ぎっ、ああ……んんあああああつ!!」

ガガガ、ウィウィウィウィン!!

「あうううう……ひうっ、もう、ダメ……あ、ああ……んああつ……イ、くう……んあつ! イくっ! イくうううう……!!」

何度絶頂させられただろうか。

絶頂するたびに全身がぐくぐと震え、腰が跳ねる。膣内から溢れ出た愛液が、ベッドのシーツをぐしゃぐしゃに濡らしていた。

「おいおい。派手にイってんなあ。そんなにパイプが気に入ったのか?」

「……!!」

ふいに、男の声がすぐ傍から聞こえた。与えられる快感が強すぎて、その気配に気づけていなかった。

「あ……うああ……これ、抜いて……」

「ん? 仕方ねえな。抜いてやるよ」

ぐじゅっ!

そう言って男は、下着をずらすと、私の膣内から乱暴にパイプを引き抜いた。

「はぐううう……」

「パイプが愛液でヌルヌルになってるぜ。どんだけ感じてんだよ」

「ううう……言う、なあ……くう……はあ、はあ……」

パイプの圧迫感から解放され、私は呼吸を整える。度重なる絶頂で、心臓の鼓動が速くなっていた。胸のローターは振動を続けていたが、今なら休息をとることが……

すほお！

「んぎいいいいいいっ!!」

再び、パイプが挿入された。

「んっ……まだあ……!!」

「これはさっきのとは違うぜ。表面に細かな突起のついたものだ。こうやってスイッチを入れると？」

「あっ!! んああああああああっ!! 棘みたいなのが、中で暴れて……ぎっ! ひぎいいいいいいっ!!」

パイプの表面を埋め尽くす無数の突起が、振動により隆壁をぐりぐりと抉る。強烈な刺激で四肢に力が入り、ベッドの支柱に結ばれた鎖がガチャガチャと音を立てた。

「やめっ! もう、やめろおおおっ……んっ、ぎゅうううっ! これ、刺激がっ……んっ、ああああああっ……!!」

「それじゃ、俺はメシ食ってくるわ。また何時間かしたら様子を見に来てやるからな」

「いやあああああああああっ!! 抜いてっ!! 抜いてえええええっ!!」

ベッドの上で身をよじる私を無視して、男は去っていった。鉄格子が閉まる、ガチャンという音が、無慈悲に室内に響き渡る。

「あっ、んんっ! うううううっ……」

みるみる私の身体が快感で埋め尽くされていく。血かにじむほど唇を噛みしめても、その勢いを止めるどころか弱めることすらできない。

やがて、身体に納まりきらなくなった快感が、勢いよく弾けた。

「ああ……イクっ……イクっ! ぐうううっ!! んんっ! んあああああああああっ!!」
大きな絶頂。大量の快感が巻き起こり、脳を焦がしていく。

「あ……ああ……んっ……がっ……ああっ……」

（気持ち、よすぎて……おかしくなりそう……ダメっ……このままだと、私、私……!）
身体も心も、とっくに限界を超えていた。

それでも私は、激しく振動を続ける機器により、快感を刻まれ、望まぬ絶頂を繰り返した。

ギューン! ギューン! ギューン! ギューン!

「んぐううっ……あ……あうううっ……イクでる……まだイって、あ、あああっ……んっ! ぐああああああっ……!!」

ヴィーイイイン! シュグシュグシュグシュグ!!

「あっ! ああああああっ!! あ——ぐ、んんぐっ!? はううううっ……いやっ、あんっ、んっ、イ——く——んんっ!! ん——ぎゅうううう……!!」

フウウウウン!! ガガガガ……ヴィーイイイン!!

「あ……んぐっ……はううううっ……んっ……あ……あっ……ん、あ……あ……もう、ダメ……っ……ぐっ! イぐううう……イク……ぎゅううううううっ!!」

……どれくらい時間が経過しただろうか。

途切れることのない快楽の嵐に、私は精も根も尽き果てようとしていた。

その時、鉄格子が開き、誰かが室内へと入ってくる。

「どうだあ、アルフェリカ様。そろそろ心が折れてるかあ？」

「……っ！ お願いいいっ！！ これ止めでっ！ 止めてええええええっ！！」

敵に協力し、私を辱め続けた憎い男に対し、私は懇願した。敵への懇願に対し、屈辱感を覚える余裕など、今の私にはない。ただこの刺激を止めて欲しいという一心だった。

「そんなこと言われても、俺はパイプ変えてこいって言われたただだからなあ」

男はそう言いながら、私の下着を下ろし、挿入されていたパイプを引き抜く。異物が挿入された違和感から解放され、私は大きく息を吐いた。

「ううう……くっ、もう、やめろお……」

「やめろ？ まだそんな口を利けるんだな。じゃあ遠慮する必要はねえな」

「うっ、ううう……もう、やめてください……お願い……」

「お、ローター余ってるじゃねえか。こっちにも付けとくか」

男は小さな器具を、私のクリトリスに貼り付けた。胸をずっと刺激し続けている器具と同じで、スイッチを入れると激しく振動するのだろうか。

「ダメ、ダメえええ……もう、付けるなあ……」

「まだ反抗的だなあ。そして、次におまんこにぶち込むパイプはこれだ。って、目隠して見えないんだよな。こんなにすこいのに」

「ひっ……！！ いやああ……入れないで……」

「これ、イボイボがエグすぎるだろ。振動はもちろん、先端が回転するらしいぞ。勢いよく反り返っているから、これが回転したら、中はもうぐちゃぐちゃにかき回されるだろうな」

「いやあ、いや、いやああ……お願いです、入れないで、ください……」

「いいねえ。だんだん立場が分かってきたか？ どうしようかな？ 入れちまおうかな？」

男はわざとらしい口調でパイプの挿入をほめかしながら、私の頬にパイプの先端を押し付けてきた。

私から屈辱的な言葉を引き出すための行為だというのはすぐに分かった。だが、これ以上の責め苦に耐えられそうになかった私は、男の思い通りの言葉を紡ぐしかない。

「ダメ……入れないで……お願い、お願い……」

「ほう。それじゃあ気高き魔法少女のアルフェリカ様は、俺たちの性奴隷になるってことでいいんだな？」

「性奴隷……!? それは……」

「嫌なのか？ じゃあ仕方ないな。ほらっ」

男が何かを操作すると、クリトリスに貼り付けられたローターが振動を始めた。敏感な部分への鋭い刺激に、思わず腰が浮いてしまう。

「あぎいいいいいっ！！ クリトリス、ダメえええええっ！！ とめてっ！ とめでえええええっ！！」

「素直にならない奴隷はおしおきだ。どうだ？ 性奴隷だって認める気になったか？」
「うううう……認めましゅ……認めりゅがらあ……これ、止めてえ……あああっ……！！」

「ようし、アルフェリカ様は、俺たちの性奴隷だ。分かったか？」

「分かりましたああ……！ だから止めて……振動、いやああ……！」

「止めてほしかったら、そうだな。これ、しゃぶれよ」

べちん、と、何かが頬に当てられた。パイプではない。パイプよりも柔らかく、棒状のもの――

（これは、ペニス……？）

男は私の傍らに座り、ペニスを顔に擦りつけていた。まだ挿入できるほどの硬度には至っていない。

「ほら、舐めて奉仕しろ」

「いつ、いやああ……ペニスを舐めるなんて……」

廃倉庫で男たちに犯された時、何度も何度もペニスを口に挿入され、白濁液をまき散らされた。あの時の苦しみと嫌悪感を思い出し、私は顔を背ける。

「なんだと？ 奴隷のくせに、生意気な態度をとるんじゃない！」

「ひう……？ んんっ!! んあああああああっ!!」

ぞぶり、と、パイプが膣内の奥深くにまで挿入された。

「おらっ！ お前は性奴隷になったんだろ？ だったら大人しく啜えろや！」

「あぐっ！ んっ！ あああああっ!! 奥まで……届いて……ひうっ！ いやああああ

ああっ！ 抜いてえ……！」

「抜いて欲しかったらこれを啜えるんだよ！」

「ひぐっ！ んっ！ ちゅぶぶっ……むぐうう……！」

頬に擦りつけられたペニスを、私は反射的に啜えていた。拘束された状態なので、顔を動かせる範囲には限界があったが、何とか顔を傾け、真横にあるペニスを口に含む。

（舐めたくない、ない、のに……このパイプ、これまでよりも太くて、突起が、中に当たって……！）

これが振動したら、どれほどの快感が生み出されるのだろうか。感度上がった身体は震えており、無意識に快感を求めているようだった。

しかし、今の状態でこれまでに以上の責めを受ければ、本当に肉体が精神のどちらかが壊れてしまうかもしれない。その恐怖が、男のペニスを自ら啜えるという屈辱的な行為を、私に強いていた。

「そうそう。初めから素直に啜えていれば、ぶち込まれずに済んだのになあ」

男はそう言いながら、私の下着を引き上げ、膣内に押し込まれているパイプを固定する。

「んちゅぐっ……っあ……舐める、からあ……それ、抜いて……」

「うまく奉仕できたら抜いてやるよ。その代わり、うまくできなかつたら、パイプを振動、回転させるスイッチを押すからな」

「ひっ……それは……」

「サボっていいのか？ 押すぞ？」

「……！ んれう……ぐむっ、ちゅじゅれう……」

スイッチを押されたくない一心で、私はペニスを啜えた。ペニスの先端、少し膨らんでいる部分を口で啜えこみ、舌を這わせる。

「初々しいなあ。こういうの、悪くないけど、いまいち気持ちよくないぜ」

「んぐちゅっ！ んんっ！ むぐう……むじゅるっ、んちゅっ……」

私は懸命に、口を、舌を動かした。しかし、ベッドに四肢を拘束された状態では、十分に首を動かせず、思うような奉仕ができない。

「んぐ。駄目だな。とりあえず1段階動かしとくか」

「んっ!? むぎゅるっ!! んむぐうううう——!」

カチリ、という音がした。

ギョインギョインギョインギョイン!

隙内に捻じ込まれている太い棒が、ぐるぐると回転しながら振動を始めた。

「ちゅぎゅううう！ んあっ！ ぎっ！ いざいいいっ!! これダメっ！ んなああ

あああああっ!!」

(何これ……奥、挟られて……! こんな太くて、突起のあるものに責められて……苦し

いはすなのに、気持ち、いいっ……!)

「あぐううっ！ んんっ！ あっ、んっ、あああっ！ きゅううううんっ!」

膨大な快感が脳に送り込まれ、ほとんど一瞬の間に、私は達する。

「イクううううううううっ!!」

どん、と強い衝撃が身体中を走り抜け、ベッドに寝ている身体が大きく跳ねあがる。

「あ……ああ……んぎっ……これ、ダメだから……気持ちよすぎて、狂ってしまう……止

め、て……あああああああっ!!」

「そうそう。このパイプ、回転と振動の強さが5段階まであるんだ。ちなみに今は一番弱

い、1段階目だ」

「一番、弱い……!?」

あと4段階も、強くなるというのか。1段階目でもこの有様なのに、さらに強くされて

しまったら……自我を保ってられる自信がない」

「リモコン式だから、簡単に強さを変えられる」

「やめう……やめ……やめえええ……!」

無我夢中で、言葉にならない声を発する。

「うまく奉仕出来たら、弱めてやるよ。でも、そうやって、サボってるようなら、どん

ん強くするからな」

「すりゅっ!! 奉仕、するからあああああ! 強くしないでえええっ!!」

「今サボってるよな? 2段階目だ」

カチリ。

「んひひひひひひひひっ!!」

パイプの振動と回転が勢いを増す。1段階強くなったただけなのに、快感が何倍に

も膨れ上がったように感じられた。

「ダメっ! んざいいいっ!! 強すぎ、んんっ!!」

「奉仕しなくていいのかあ?」

「んあうううっ!! んむっ! ぐっ、ふむぐぐっ……! ちゅびっ、んっ、むぶううううっ

……!」

齋しの言葉を受け、私は勢いよくペニスを吸い付いた。



がむしゃらに舐めまわすだけのその行為が、果たして奉仕になっているのか分からない。だが私には、必死にペニスを刺激する以外に選択肢はなかった。

「あくむうっ！ んっ！ じゅるりゅう……むっ、んっ、ぐ、ぶ、ぐむううっ！」

「どうしたどうした。今少しだけよかったのに、まだヘース落ちてるぞ」

「んんっ……じゅぐ、むぐう、んっ、れぶむうっ……」

（こんな、パイプで激しく責められながら、ペニスを啜えるなんて、無理っ……気持ちよすぎて、口も舌も、思うように動かせない……！）

ヴィイイイン！ キュッチュ！ キュッチュ！

回転するパイプの先端が子宮口に沿って膣奥を撫でまわしている。その刺激に抗うことなど、できない。

男に奉仕しなければいけないのに、私が達しようとしていた。

「ひゅぐんんっ！！ むぐっ……ん——んんんんっ！！」

びくん！ びぶんっ！！

男のペニスを啜えながら、私は大きく絶頂した。

「ぐむう、ぐっ、こひゅうう……ぶぐう、んっ、じゅれう……」

「どうして奉仕しているお前がイクんだよ。口止まってるし。スピードアップだ」

「ぎゅひゅうううんっ！ んぐむうううううっ！！」

3段階目。さらに回転と振動が勢いを増し、私の膣内を激しく抉る。腰が痙攣したようにがくがくと揺れ、パイプと膣の結合部から大量の愛液が飛び散っている。

ペニスを口の中に入れてはいたが、もはや奉仕どころではなかった。

「なんだよ。奉仕しないのか？ もっと激しくしないとやる気出ないのか？」

「んぐうう……むぐうう、んっ！ んんっ！ んむううっ！」

「仕方ない、4段階目だ」

「きゅぐううううううっ！！」

ギシュイン！ ギシュイン！ ギシュイン！

パイプが膣内で暴れまわる。中途半端に勃起したペニスが、私の口から零れ落ちた。

「あぐっ！ んっ！ あっ、いいいいいいっ！！ ダメっ！！ ダメええええええっ！！

激しすぎて、これ、んんっ！！ イぐううううっ！！ イくっ！！ イきゅうううううううっ！！」

刺激が脳天に突き抜け、目隠しの内側にチカチカと閃光が走った。

「あ……ああうう……んぎっ……もう、ダメ……」

絶頂しすぎて呼吸がままならない。

今すぐ気を失いたい。眠りにつきたい。

しかし、乳首、クリトリス、そして膣内を同時に責められている今、それは叶わない。

「振動、もう、やあああ……まだすぐ、気持ちよく……んぐっ、ん、んんっ……！」

「よがりすぎだろ。もう奉仕する気なしか。ほら、お望み通り最大にしてやる」

カチリ。無慈悲な音が聞こえた。

ギューイイイイイイイン！！

「……！！ いっ！ ざいいいっ！？ んっ！！ ざいいいいいっ！！」

下着で固定されたパイプがぐにぐにと脈打っている。回転はますます苛烈になり、膣奥が削られていると思えるほどだった。

「んんんんんっ！！ ああああああああっ！！」

私は絶叫した。溢れ出る快感が、私を絶頂へと誘う。

（お腹の中、パイプが暴れて……胸も、クリトリスも振動し続けて……ダメ……気持ちいい……イクっ……まだイクっ……！ 何度でも、イってしまっ……！）

「っう——っ！ んっ！ ——！！ んああああ——んぎっ！！ イ……ぐ——っ……イクう！！ イぐうううううううううっ！！」

絶頂の連鎖。

快感に埋め尽くされた頭では、身体をまともにコントロールすることができない。身体中がびくびくと痙攣を続けていた。

「エロい顔してるなあ……ムラムラしてきた。奉仕してくれないなら、その口、勝手に使わせてもらうぞ」

「っぶう！ ん……ぐるじゅううっ！」

口内に根元まで押し込まれた男のペニス。絶頂直後で前後不覚になっていた私は、ただそれを受け入れるしかない。大量に分泌されていた唾液が、ペニスに絡みついていく。

「んぶうっ、じゅぐっ！ んっ！ ぎゅぐううううっ！ むうっ、じゅちゅりゅ……んむ

っ！ ぐううううううっ！！」

男は私の顔を掴み、激しく腰を振り始めた。ペニスが私の口内を滑る。

（奥まで、届いて……動き、激しい……！）

「じゅぐううっ……おうるっ！ むぐっ！ ぶりゅうう！ んんっ！ じゅぐうっ！ ん

れいうっ……むっ、ぐっ、ぶりゅっ、じゅぶぐぶう……」

私は男にされるがままになっていた。全身を襲い続ける快感の波に比べたら、喉を圧迫される苦しみなど、些細なことだ。100倍にまで性感を高められた身体は、ペニスが擦れる舌でさえも、快感を得るようになっていた。

じゅぶっ！ じゅぶっ！ じゅぶっ！

ギューンギューンギューンギューン！！

全身が、快楽の中にとっぷりと浸かっているのが分かる。今なら、肌を軽く撫でられただけでも、それが快感に変わるだろう。

「んじゅっ！ むっ！ ぐにゅりゅうっ！ ひむっ、ぐ、むぐぐうっ……じゅりゅっ、んっ！ ぶりゅうううっ！」

「よし！ いい、いいぞ！」

（ペニスが、震えてる……射精が、近い……！ ダメっ……気持ちよすぎて、私も、イッてしまっ……！）

「出るっ！ うおおっ！」

「ぶじゅっ！ むっ！ ぐりゅじゅうううううっ！！」

としゅうううう！

2人は同時に絶頂した。

勢いよく口内に巻き散らされる精液。生暖かく、ねばつく液体が、口の中を埋め尽くしていく。

「じぶっ……ぐむっ……ごっ……んくっ、んっ……んぐう……」

ペニスで口を塞がれたままの私は、大量の精液を御しきれず、静かに喉を鳴らした。生臭い液体が身体の中に入っていく嫌悪感に、身震いする。

「ふう。まあまあ、よかったな」

「……うがあっ！ ごほっ！ ぐ……ごぶっ……！ うえ、っ……」

ペニスが引き抜かれると、私は口内に残っていた精液を吐き出す。口元がべったりと、不快な液体で覆われた。吐き出し切れなかった分が舌の上に残っていることも、不快さが増している理由の1つだった。

「うあぐう……んっ……あああああ……！ もう、振動……止めてえ……！」

私が絶頂しようが、男が精液を巻き散らそうが、ローターやパイプは私を責め続け、快感を送り込んでいる。

「嫌だね。きちんと奉仕できたら考えたけど、結局何もしてないじゃないか」

「ぐうう……んっ、あ、あ、あああ……奥でぐりぐり……んっ……もう無理、だからあ……抜いて、お願いいい……」

「ははっ。いいザマだな、アルフェリカ様よ。しばらくそのまま耐えてろよ。他の奴が来た時に、奉仕するから抜いてくれてお願いしてみたらどうだ？ ま、あの程度の奉仕じゃあ、望み薄だけだな」

「待つて……んああ……いやああ……もう、放置されるのは、いやああ……！」

カチャン！

鉄格子が閉まった。男が部屋から出ていったのだ。

「あ……ぐっ、んああああ……そんな、あ、ああ……また来るっ……気持ちいいの、くる

うううう……あつ、イクっ……イ、く……んあああああああつ!!」
 ヴィイィィィン!!

じゅっぶじゅっぶじゅっぶじゅっぶ!!

男がいなくなっても、機械は容赦なく私を責め続ける。

私にできるのは、男たちのうち、彼がここに戻ってきて、気まぐれに私への責めを中断してくれるように、祈ることだけだった。

「うあああああつ……!! ひううっ、んんっ!! あつ、イぐう! イ、ぐうううううううっ!!」

その時まで、私の精神が崩壊していないという保証は、どこにもなかった。

21

「んぐっ、ちゅぶっ! じゅぐ、んむっ、るじゅむうううっ……!」

私は何度も何度も、男たちのペニスを咥えた。

だが、それは奉仕をしているわけではなく、ただ私の口が男たちに使われているというだけだった。

パイプやローターによる責めは相変わらず続いており、私に奉仕を許すような余裕は与えられなかった。

「ちゅぶっ、ぐむううっ、んっ、るれりゅう……ふむうう、んんんっ!」

男たちの中で、私にペニスを咥えさせることが、遊びとして広まっていた。パイプの振動と回転で身を震わせ、定期的に絶頂する私を眺めながら、口にペニスを突き入れるのが楽しいらしい。

私には、一生理解できそうにない嗜好だった。

「んんっ、ぐっ、ふいぐうう……んんっ!! んぐっ、ひいぐうううううっ!!」

「お? イったか? じゃあ俺も出してやる!」

「みゆるぐっ!? むぐおおおっ……!! じゅぐ、ぶみゅううううっ!!」

私が絶頂した直後、男は精を放出した。また口の中が液体で満たされていく。

「ぐぶぐう……っば、こほっ……ぐ、うあ……」

大量の精液が口の中でドロドロになっていった。少しでも多く吐き出したいが、もはやその力すら残っていない。

「まだ口使っていない奴いるか?」

「いや、お前で最後だよ」

「ふうん。じゃあ、そろそろ終わるかあ」

「(……? 終わり……?)」

男はそう言いながら、スイッチを操作した。すると、膣の中で猛威を振るっていたパイプの動きがピタリと止まる。

「あ……あああ……」

胸とクリトリスを刺激していたローターの振動も止まった。刺激から解放され、身体から一気に力が抜ける。

「はあ……はあ……んっ……はあ、っ……」

私はぐったりとマットレスに身を預けながら、時折びくびくと身体を震わせた。これで、ようやく休むことができる――

「じゃあまた、普通に犯していくか」

――わけではなかった。

男の1人が私の脚を掴む。

「ひっ……！ いや、もう……もう、犯すな……」

か細い声で抵抗する私を無視して、男は私の膣内に突き刺さっていたパイプを強引に引き抜く。

「んぎいいいいっ!!」

パイプの突起がぞりぞりと膣壁を擦り、背中を快感が走り抜けた。

「それじゃあ、トロトロおまんこ、どんな具合か、堪能させてもらおうか」

「ひうっ……あ……ダメ……もう、ダメええ……」

男のペニスが挿入される、その寸前の出来事だった。

「嫌がる女を無理やり犯す……あなたたち、相変わらずなのね」

不意に聞こえたのは、女性の声だった。

柔らかな口調。だが、芯には侮蔑と憎悪が込められているような、冷たい声だった。

その声に、男たちが騒めきだった。

「お前は……!」

「どうしてここに――うぎゃああ!」

男の悲鳴と、何かが倒れるような音。突如現れた女性によるものだろうか。

状況を確認したくても、四肢を拘束されて目隠しをされている状態では、入ってくる情報が少なすぎた。

「1つ質問に答えなさい」

声の主が、部屋の中央まで進む。

「魔法少女ノーブル・ローズはどこにいるの?」

（ノーブル・ローズ? 舞華……?）

その女性は舞華を探しているようだった。だが舞華はここにはいない。レスターに連れ去られ、今頃はエビルズアークの基地にいるはずだ。

男たちもそれを分かっているのか、

「ここには、いねえよ。魔力がたくさんある奴が、こんなところで俺たちに犯されてるわけないだろ」

「くっ……でも、無駄足じゃなかった」

しゅるりと、私の目隠しが外された。室内の照明は薄暗かったが、長時間光を受けていなかった目が眩む。

徐々にはっきりしてくる視界。ベッドの傍らに佇む女性、いや、少女の姿が目映った。

「あなた、は……プリズム・シャーリー……?」

ステッキを手にし、魔法少女の衣装に身を包んだ少女。この世界における1人目の魔法

少女だ。

舞華の屋敷にかくまわれており、その名前だけは聞いていたが、実際に顔を合わせるのは初めてだった。

「私は、プリズム・シャリーじゃない……プリズム・シャリーは、もうどこにもない」

彼女の持つステッキは『空』のはずだったが、ステッキの形状も、魔法少女の衣装も、私の知る『空』の魔法少女のものとは異なっている。

漆黒と濃紺で彩られた衣装、灰色の髪、紅い瞳……白と青で彩られていたはずのかつての衣装とは、似ても似つかない。

「さあ、早くこの人の拘束を解きなさい」

彼女が男たちに指示する。

「こいつは、俺たちが姉さんから買った——」

「ふざけてないで！ あなたたちのモノなんかじゃない！」

彼女は怒りを露わにした。

「そういえば、私もあなたたちに、犯されたよね……街を守るために戦っていた私を、よってたかって、何度もやめてって言ったのに、犯し続けた……」

彼女の怒りに、男たちが息を呑む。

「そのあなたは、貸倉庫でも私を犯して、暴力も振るった……許せない！」

彼女の視線が。男たちの1人、黒眼鏡をかけた男に向けられる。

「あなたみたいな人は、ここで死ねばいいのよ！」

「ひっ……！」

黒眼鏡の男は後ずさったが、狭い室内で簡単に壁に追い込まれてしまった。

「この距離で『衝撃』を受けたら、どうなると思う？ 体が潰れて、ぐちゃぐちゃになっちゃうでしょうね。あなたみたいな悪党にふさわしい最後よ」

「やめろ！ やめてくれ！」

「あなたは私の懇願を聞いてくれたことなんてないじゃない！」

彼女はステッキを振りかぶる。

「消えなさい！」

「うわあああああっ！」

男の悲鳴が響き渡る。

しかし、彼女のステッキは振り下ろされてはいなかった。

「くっ……なぜ、こんな奴を……かばうの……」

彼女は苦しそうに頭を押さえている。

（どうしたこと？ 何が、起きているの……？）

彼女は男を殺そうとしたが、その寸前で思いとどまったということだろうか。彼女は頭を抑えながら、怒鳴り散らすように声を発する。

「ぐっ、早く、この人を解放しなさい……！ 早くっ！」

「は、は……！」

彼女に睨まれた男たちが、私の手足の拘束を解く。自由になった手足。だが、度重なる凌辱で疲弊しきっている今の私には、その手足を動かすことはできなかった。

「この人の、ステッキは？」

「あっちのテーブルの上に」

「……」

彼女は男が指さしたテーブルに向かい、上に置かれていた私のステッキを回収すると、再び私の傍へと戻ってきた。

「立てる？」

「……いいえ、立てそうに、ないです」

「分かった」

彼女は私に肩を貸して立ち上がらせる。身を任せることしかできない私を、彼女は力強く支え、歩き始めた。

男たちをその場に残し、鉄格子をくぐる。男たちの姿が見えなくなってから、私は彼女に話しかけた。

「ありがとうございます……助けてくれて……」

「いいの。お礼を言われるようなことじゃない。あなたがこんなに酷い目に遭う前に助けることができなかった。それに、探していたのは、ノーブル・ローズ……早乙女さんの方だから」

「……ごめんなさい。早乙女、舞華は——」

「分かってる。とにかく、早乙女さんの家に戻りましょう」

「はい……」

たとえ舞華を探しに来たのだとしても、あの地獄から救い出してくれた彼女には感謝しかない。

張り詰めた糸が切れた私は、彼女に身を預けたまま、気を失った。

22

私は屋敷のベッドで目を覚ました。

身体は清潔になっており、新しい服に着替えさせられていた。

（舞華に助けられた時を思い出すな……）

だが、あの時助けてくれた舞華は、今はこの屋敷にいない。

（彼女を、助け出さないと……）

私は疲労が抜けきっていない体を無理やり起き上がらせると、廊下に出る。

時刻は夜。月明かりが長い廊下を照らしている。私は食堂に明かりがついていることに気づき、そちらへ歩を進めた。

「アルフェリカさん！ 起き上がって大丈夫なんですか？」

食堂では、2人の人物が向き合って話をしていた。1人は、彩音という家政婦の少女だ。食堂に入ってきた私に、気遣うような言葉をかけてくる。

「これくらい、大丈夫です……まだ迷惑をかけてしまいましたね……」

そしてもう1人、こちらも家政婦の少女と同じくらいの年齢の少女だった。

栗色の髪、小柄な体軀。この姿で顔を合わせるの初めてだが、一目で分かった。私を

男たちの巣窟から救い出してくれた魔法少女、プリズム・シャーリー。本名は確か、小日向沙織だ。

「改めて、礼を言います。私を救い出してくれて、ありがとうございます」

私は彼女に頭を下げた。それを見た彼女は、そっと私から視線を逸らす。

「私は早乙女さんを探していた。そこであなたを見つけただけ。いわばついでよ」

「それでも、助けてくれたことに変わりありません。感謝します」

「……」

彼女は応えず、食堂の出口へと向かう。

「それじゃあ、私は行くから」

「待ってください！」

家政婦の少女、彩音が回り込み、小日向さんの進路を塞ぐ。

「1人で敵の基地へ乗り込むなんて、危険すぎます！」

「だが、舞華はそこにいる。今も酷い目に遭っているかもしれない。急いで助けに向かわないと。彩音は舞華を助けてほしくないの？」

「助けてほしいよ！……でも、1人で行くなんて、危険すぎる！」

そう言って、彩音は私の方を向いた。

「アルフェリカさん、お願い！ 沙織さんと一緒に、お嬢様を助けて！」

「私は……」

2人の魔法少女が力を合わせれば、エビルズアークの基地から舞華を救出することができかもしれない。だが……

「無理、なのです」

「……えっ？ どうして……？」

「今の私は、魔力をすべて失って……もう、変身して魔法少女になることは、できない……」

魔力がなく、変身できないまま同行しても、ただの足手まといになるだけだ。

（舞華を救いたいの、私には、何もできない……）

舞華が捕らえられてしまった責任は私にあるというのに、何もできない自分が不甲斐なかった。私はうつむいて唇をかみしめる。

「大丈夫です！」

陰鬱な雰囲気吹き飛ばすような大声で、彩音が叫んだ。

「魔力なら、ここにありますが！」

「……？ 魔力があるって、どういうことなのですか？」

彩音は私に駆け寄ってきて、小さな宝石のようなものを私に差し出した。

「これは……！」

宝石から、魔力を感じる。これは、魔力を凝縮したもの……いわば魔力結晶とも呼ぶべきものだった。

「これがあれば、魔力を回復できますよね！」

「確かに、ここから魔力を補充できます……！ しかし、どこでこんなものを？」

「お嬢様です。お嬢様が、自分の魔力を、貯えとして形にしていたんです。それを、自分に何かあった時のために、私に託してくれていたんです」

彩音は愛おしそうに、魔力結晶を見つめている。

「舞華が……これを……」

「はい。だからアルフェリカさん、これを使って、魔力を回復させてください。そして、舞華お嬢様を助けてください」

彩音の真摯な視線が真っすぐにこちらを向いている。

自身の余剰魔力を結晶として残してしてくれた舞華。そしてそれを私に提供してくれた彩音。

2人の想いに、応えなければならぬ。

「分かりました。舞華は、必ず助け出します！」

私は差し出された魔力の結晶を、力強く握りしめた。

23

夜の街を駆ける、2つの影。ビルの屋上からビルの屋上へ跳躍しながら一直線に目的地へ向かっている。目指すのはもちろん、エビルズアークの本拠地だ。

舞華が残してくれた結晶には、私の魔力を全回復できる量が蓄えられていた。そのおかげで、私は再び魔法少女の衣装に身を包むことができる。

白と紫で彩られた衣装。上半身は肌着とロープ。下半身は丈の短いスカート。手足を手袋とブーツが覆っている。髪は輝く金色に変わっており、側頭部には髪飾りが付いている。

（ありがとう、舞華……）

魔力を失った私を、舞華は再び救ってくれた。この魔力で、必ず舞華を救い出す。それが私にできる、唯一の恩返しだ。

私は、私を先導する魔法少女の姿を見ながら、屋敷での彼女との会話を思い出した。

「プリズム・シャリーは、エビルズアークの基地の位置を、知っているのですね？」

「ええ……早乙女さんから聞いているかどうか分からないけど、私はエビルズ・シャリーとして、エビルズアークの手先になっていた……だから、基地の場所も、内部の構造も、よく知っている」

「エビルズ・シャリー……でもそれは、エビルズアークに操られて……洗脳されてのことだったのでしょうか？」

「違う。私は自ら、彼らの仲間になった。人間が……憎くて、滅ぼしてしまいたいと思っていた……」

「でも、今はそうは思っていない。そうよね？」

「今でも人間は憎い。男はよってだかて私を犯して、女はそれを止めなかったした。私はどちらも、一生許せそうにない……」

「……」

「だけど、早乙女さんは別。彼女は危険を冒して私を救ってくれた。こんな私のことを、大切だと言ってくれた。彼女だけは、守るに値する人間だから……」

「その気持ちがあれば、あなたは大丈夫。あなたはもう、エビルズ・シャリーなんかじ

やないわ」

「……でも、私の変身後の姿は、エビルズ・シャリーのままなの。私の心はまだ、悪に染まっただけだということよ」

「そうかもしれないけど、あなたが私を助けてくれた時、男たちを殺さなかった。あなたの中に、良心が残っている証拠よ」

「分からない……私のことはいいよ。早乙女さんを助けに、一緒に来てくれるなら、早く行きましょう」

「……そうね。案内は任せました、プリズム・シャリー」

「私はもう、プリズム・シャリーじゃない」

「じゃあ、エビルズ・シャリー？」

「……ただのシャリーでいいよ」

「分かった。よろしく、シャリー」

「よろしく、アルフェリカ」

私は黙って、シャリーの背中を追いかけて続けた。シャリーも、言葉を発することなく、移動を続けている。

ビル街を抜けて住宅地へ。住宅の屋根伝いに跳躍していく。エビルズアークの基地は、街の中心部とは真逆にあるようだった。

（身体の疲労が大きい……）

思い返せば、今日は長時間に渡って犯され続けた。グリーヴァ、パイオ兵、そして邪な男達。魔力は回復したが、体力の方は十分に回復していない。

だが、舞華の置かれている状況を考えれば、私の体力が回復するのを待つ余裕はなかった。

（舞華、待っていてください……！）

うっすらと、東の空から光が差し込んできた。

夜明けが近い。長かった夜が、終わりを迎えようとしていた。

24

エビルズアークの基地は、街の郊外にある、山の中にあつた。木々の間にぽっかりと口を開けた洞窟。その奥から、怪人の気配が漂ってくる。

（なるほど。奴らの基地は、こんなところに……）

朝日の届かない暗い闇への入り口。アーク・デュランの根城にふさわしい場所だ。

「行きましょう、シャリー。ノーブル・ローズを探しましょう」

「ええ……この先はいつパイオ兵に遭遇してもおかしくない。気を付けて」

「分かりました」

私たちは同時に洞窟内へと飛び込んだ。

薄暗く、細い通路。しばらくすると、周囲の壁が岩肌から金属質のものに変化する。

（エビルズアークは、こちらの世界の技術を取り入れて基地を建造した？）

私のいた世界の彼らは古城を拠点としていた。これが同じ組織のものとは、にわかには信じがたい。

Dr.バルドあたりが、意欲的にこちらの技術を取り入れたのだとしたら、私の知らない手法で基地の防衛を行っている可能性がある。

「アルフェリカ、来たよ」

「パイオ兵……！」

通路を埋め尽くし、こちらの行く手を阻む黒い怪人。こちらの侵入は察知されていたと考えるべきだろう。

この数、1体1体相手にしていたのでは時間がかかる。敵に迎撃の準備をさせる時間を与えるのは得策ではなかった。

ならば、速やかにせん滅するのみ。

（形状変化、『m』！）

私は左手にステッキを持ち替え、正面に突き出す。ステッキを弓柄として、上下に弓幹、弓幹の両端を結ぶように弦が出現する。薄紫に光るそれは、私の魔力で生成したものだ。さらに、私の右手の中に、1本の矢を、同じく魔力で生成する。

「シャーリー、ここは私が！」

私は矢を弦に番えると、弦を引き、正面のパイオ兵たちに向かって放った。

パシュウ！

光の尾を引いて直進する魔力の矢。このままでは、正面の1体しか倒せない。

（今っ！ 拡散！）

魔力の矢にはしかけがあった。私の操作で、1本の矢が数えきれないほどの矢に分裂する。

速度を保ったまま、無数の矢がパイオ兵の群れに襲い掛かる。次々と怪人は魔力の矢に貫通され、倒れ、光の残滓となって消滅した。

通路に残っている人影はない。

「すごい……こんなことが、できるなんて」

シャーリーが驚いたようにこちらを見ている。

「あなたも、訓練すればできるようになりますよ」

（そうか、シャーリーは魔法の使い方を誰からも教わっていないのか）

ステッキに選ばれ、魔法少女となった彼女だが、魔力の扱い方を知らずに戦っていたのだ。それも、たった1人で。

（もっと私が早くこの世界に来ていれば、彼女は壊れずに済んだかもしれない）

私とノーブル・ローズとプリズム・シャーリー。初めから3人が力を合わせ、エビルズアークと戦っていたなら、誰も傷つかずに勝利できただろう。

だが、あったかもしれない可能性を惜しむのは不毛なことだ。3人とも、既に敵に奪められてしまった。この事実、もう変えられない。

「行きましょう、シャーリー」

「ええ」

私たちは通路を駆ける。道中散発的にパイオ兵が現れたが、私とシャーリーが殴り飛ばし、排除しながら進んだ。

すると突然、宙に浮かぶ金属の物体が私たちの前に躍り出た。

（怪人の気配はしない……！ この世界の技術による自立機械!?）

戸惑う私を置いて、シャーリーはステッキを振りかぶり、機械に突進していく。

「“衝撃”っ！」

ドオオオン！ という炸裂音。シャーリーの一撃を受けた機械は、バラバラに砕け、破片が床に散らばる。

（大気を撃ち貫く魔法。『空』の魔法少女の得意技……）

衣装の見た目は変わってしまったが、その魔法に、仲間の1人の面影を見た。

「こいつは硬いから、気を付けて」

「了解」

その時、反対側からもう1体、自立機械が出現する。

（形状変化、『槌』！）

ステッキから具現化された魔力が伸び、槌の形状になる。私の形状変化の中では、『槌』状態が一番破壊力のある形態だ。

「だああああっ!!」

魔力を籠めた一撃を受け、自立機械は砕け散る。

「私の“衝撃”並みの威力ね、そのハンマー。相手が硬くても問題ないみたい」

シャーリーが悔しがっているように見えたのは気のせいだろうか。彼女はすぐに私に背を向け、通路を進み始めたので、それ以上彼女の感情を掴むことはできなかった。

その後も、シャーリーの先導に従い、基地内を駆け抜けていく。

やがて通路が終わり、少し開けた空間に出た。金属の壁に覆われたその空間には、大量のバイオ兵が待ち構えていた。部屋の反対側にある別の通路を塞ぐように陣取っている。

しかし、私もシャーリーも、既にその邪悪な気配を察知していたため、驚くことはない。

「シャーリー、ルカンドがいます」

「ええ、いよいよ四魔将が出てきた」

バイオ兵の集団の中に、漆黒の肌を持つ悪魔族の女性がいることに気が付いた。アーク・デュラン配下、四魔将の1人、ルカンドだ。

「まったくもう、驚かせてくれるわね。まさかあなたが2人で乗り込んでくるなんて」

バイオ兵の群れをかき分けて、ルカンドが前に進み出る。

「アルフェリカ、あなた、まだ魔力を回復させて……今度はどうやったの？ お隣の魔法少女から分けてもらったのかしら」

「お前の知ったことではない」

「あら。生かしておいてあげたのに、つれないわねえ。そして、そこにいるのはエビルズ・シャーリーじゃない。まさかあなたがここに帰ってくるなんてね」

「……あなたと会話するつもりはないから。ノーブル・ローズはどこにいるの？」

シャーリーがルカンドに問いかける。するとルカンドは笑みを浮かべながら考えるようなポーズをとった。

「さあ、どこかしらねえ。この基地にいるのか、別の場所にいるのか、私にも分からないわ」

（時間を稼ぐつもりだな）

ルカンダの様子から、私はそう判断した。私たちと戦えるだけの戦力が集まるのを待っているのだろう。

「シャーリー、あなたは先に進んでください。あいつの相手は、私がします」

私はシャーリーにそう提案した。ここで2人で戦えば、次々とやってくる敵を相手に時間を取られるだけだ。ここで私が、ルカンダと後続の敵を引き受ける。その間に、基地の内部に精通しているシャーリーが舞華を助け出す。

これが最善の手だろう。

「しかし、1人では……」

「あの程度の数、問題ありません。今はノーブル・ローズを救出することが最優先です」

「アルフェリカ……」

「私が道を切り開きます！ はあああっ!!」

私は槌に変化させたステッキを振りかぶり、魔力を集中させながら跳躍した。私たちの行く手を阻むパイオ兵の群れの中央に向けて、槌を叩きつける。

ドオオオン！

土が叩きつけられ、金属の床に亀裂が入る。その衝撃で周囲のパイオ兵が吹き飛び、床を転がった。

「今です！」

「……っ！」

私の合図で、シャーリーが通路の中に駆け込んでいく。私はその姿を見送ると、通路を塞ぐようにして敵の方に向き直った。

「まったく、無茶するわねえ」

空中に跳び上がり、私の攻撃を回避していたルカンダが、部屋の中央にゆっくりと着地する。

消滅を免れたパイオ兵たちが、ルカンダの元にわらわらと集まってきた。

「立場が逆になったな。ここを通りたければ、この私を倒すしかないぞ」

「ふん！ これからどんな増援が来る！ いつまで持ちこたえられるか、試してあげる！ 行きなさい、パイオ兵達！」

ルカンダの合図で、パイオ兵の群れが襲い掛かってきた。

（シャーリー、頼んだぞ……）

私はそれを迎撃すべく、ステッキに魔力を集中させた。

25

早乙女さんを見つけ、助け出す。あの時、私がしてもらったように。

アルフェリカさんを残し、私は1人、基地内を駆け抜ける。

パイオ兵の姿はない。この先に配備されていたパイオ兵は、先ほどの部屋に集結してしまっただろう。

ルカンダが、あの場所で待ち構えていたことから、早乙女さんは間違いなくこの先にいるはずだ。私の予想とも一致する。

苗床。

そう彼らが呼んでいる場所。捕らえた女性から、効率よく魔力を収集するために作られた場所。

（あんな場所に、早乙女さんが……）

できれば別の場所にいてほしかった。あそこは人間の入る場所じゃない。

一刻も早く、救出しなければならない。

通路の奥にある階段を駆け上がり、さらに細くなった通路を進むと“苗床”へと辿り着く。

床や壁が、ぶよぶよとした触手で作られた肉の部屋。この中に囚われると、周囲の触手によって犯され、最後の一滴まで魔力を吸収されてしまう。

私は金属の床と触手の沼との境界線で立ち止まり、苗床の中を見た。

そして、言葉を失った。

「そんな……」

恐れていた光景が、そこにはあった。

苗床の中央には、触手に巻き付かれて宙吊りになっている、黒髪の少女の姿があった。一糸まとわぬ肢体が粘液や精液にまみれている。また、身体に至る所に紋様が刻まれ、

怪しく輝いていた。

その身体からは力が失われ、ぐったりとしている。目はぼんやりと開いているが、何も映っていないのか、視界にいる私に気づいた様子はない。

そして今もお、彼女の体内には太い触手が突き刺さっており、激しい抽送によって彼女を責め続けていた。

「早乙女さん！」

私は彼女を救うべく、苗床の中に飛び込もうとしたが、脚に力を籠めた段階で思い止まった。

早乙女さんのすぐ横に、見慣れた人物の姿があったからだ。

「レスター……！」

いや、それは人の形をしているが、人ではない。アーク・デュランの娘である彼女は、親と同じく触手の集合体だ。その姿は、擬態したものでしかない。

触手の髪の毛を伸ばして床に突き刺し、その体を持ち上げて、早乙女さんのすぐ横に浮かんでいる。

「あはっ。シャーリーちゃん、シャーリーちゃんじゃない！ すいぶん久しぶりだね！」

「あなた、ノーブル・ローズに酷いことを！」

「あれっ？ あなただなんて、他人行儀な呼び方をしちゃって。前みたいに、お姉さまって呼んでくれないの？」

「くっ……うるさいっ……！ 今はそんなこと、どうでもいいでしょ！」

私をエビルズアークに勧誘した張本人を前に、私は動揺を隠せなかった。レスターは、クラスメイトに私を輪姦させ、私を絶望に陥れることで、悪の道へと引きずり込んだのだ。

（あれは、私の心が弱かったことで起きた悲劇……）

その後、クラスメイトの男子達はレスターによって皆殺しにされた。私に酷いことをした彼らのことは許せないが、果たして命を奪われるほどの罪だったのだろうか。私と同じ

クラスになったばかりに命を落とした彼らに、私は償う術を持たない。

「レスター、ノーブル・ローズを解放して！ もう魔力を吸い尽くしたんでしょ！」

「ローズちゃんの魔力は、ここに来るまでに全部なくなっていたから、別に魔力が欲しくて犯しているわけじゃないよ！」

「……!? それじゃあ、何のために……?」

「うーん、ローズちゃん反抗的だから、騷けておこうと思って」

レスターが笑いながら早乙女さんの頬を撫でる。レスターに触れられ、早乙女さんはびくんと身体を震わせて反応していた。

「騷ですって……?」

「ローズちゃんには、ずっと魔力を提供してもらうことになるからね！今のうちに、従順になってもらわないと！ここに來てから、ずっと犯し続けているの！」

「そんな……なんてことを！早乙女さん！大丈夫？返事をして！」

「無駄だよ！ここに連れてきてからずっと犯し続けたせいで、もう話しかけても反応してくれないよ！」

レスターは髪の毛触手を器用に動かして、空中でぐるぐると回っている。

「ふふふ。ローズちゃん、最初は健気に抵抗していたんだけど、ルカンダにたつくさん紋様を付けてもらったから、快感に抵抗できなくて、どんどん感じちゃって、何度も何度も絶頂して、あく、おもしろかった！」

「……」

「どんな紋様か知りたい？紋様のある場所が、性感帯と同じ感度になるの。ほら、こうやってなぞると……ふふふ、ほら、感じる！」

「……」

「魔力を貰えないから、最初はイカせず寸止めで遊んでいたんだ！あー、イきたいのに口に出さないローズちゃん、思い出すだけでソクソクしちゃう！」

「……」

「そのうち心が折れて、触手を挿入してください、イかせてくださいってお願いするようになっちゃったけどね！」

「……」

「触手で一斉に紋様を撫でた時の反応、すごかったなあ。口の中にも紋様があるから、口に触手を挿れたら、とっても感じていたの！」

「……」

「その後、何度も何度も連続で絶頂させたら、もうまともにしゃべることもできなくなつて、ヒイヒイ言いながら泣き叫んでたっけ」

「……」

「ローズちゃん、『ごめんなさい』とか、『許して』とか、何も悪いことをしていないのに、ずっとそればかり言っていて。触手で口を塞いだら、涙を流しながら唸って……ああ！とっても面白かったなあ！」

「……」



「ずっとイかせ続けていたら、そのうち反応が無くなっちゃって、今はこんな感じ。あう、とか、たまに唸るくらい。つまらないよね！ もう壊れちゃったのかな？ それとも時々イってるからまだ壊れてないのかな？ シャーリーちゃんはと思う？」

「……もういい」

私はレスターの言葉を聞きながら、怒りに身を震わせていた。

心優しい彼女が凌辱の限りを尽くされたことに、心が締め付けられるように痛む。一刻もはやく、彼女を苗床から……レスターから救い出さなければならぬ。

「ノーブル・ローズを解放する気がないのなら、力づくで取り返す！」

「あはっ！ いいよ、シャーリーちゃん！ おいで！」

私はステッキを握り締める。

レスターのコントロール下にある苗床に足を踏み入れるのは、かなりの危険を伴う行為だ。一歩踏み込んだが最後、周囲から触手の群れに襲われ、絡めとられてしまうだろう。ならば苗床の外であるこの位置から、早乙女さんを救い出すまでだ。

（風の刃を巻き起こす！）

ステッキを連続で振るい、魔力によって生み出した風の刃を、苗床の中に次々と送り込んでいく。風の刃は早乙女さんを拘束している触手を一つ一つ切り裂いていった。

「あっ！ 遠くからなんて、すごい！」

何十本もの触手を引きちぎり、早乙女さんの拘束を解く。触手による支えを失った早乙女さんは、ぐらりと体を傾け、頭から落下を始めた。

「風よ！」

私は落下する早乙女さんの真下に、吹き上がる風を発生させた。私自身を飛行させる時の魔法の応用だ。早乙女さんの落下は止まり、空中でふわりと漂っている。

(こっちに……!)

風の角度を変え、彼女の体を私の方に引き寄せる。

「逃がさないよ!」

苗床の壁から新たな触手が出現し、早乙女さんの体を掴もうとした。

(その触手も切り刻む!)

私は早乙女さんを引き寄せながらも、ステッキを振るい、風の刃を巻き起こした。風の刃により、新たな触手を次々と切断していく。

やがて、私は早乙女さんの体を受け止めた。粘液と精液にまみれたその体を、両腕で包み込む。

「ノーブル・ローズ! しっかりして!」

「あ……うあ……?」

近くで私の声を聞いても、彼女はあまり反応を示さなかった。

(こんなになるまで犯すなんて、許せない……!)

だが、私は怒りを抑え込んだ。今ここで、レスターと戦うのは得策ではない。目的は、彼女を救い出すこと。早くアルフェリカと合流し、基地から脱出しなければ。

「あはっ! ローズちゃんを奪われちゃった!」

「……?」

苗床の中にいるレスターが笑っている。私に早乙女さんを奪い返されたというのに、少しも焦った様子はない。

私はその様子に嫌な予感を覚えた。だが、その時には、もう遅かった。

「でも、いいの? そんなところにいて……シャーリーちゃんがここにいた時より、苗床は広がっているんだから!」

ポコォ! 突如、私の足元の床が崩れ、その下から触手が飛び出した。床だけではない。左右の壁も崩れ、その中から触手が出現する。

「なっ……!?!」

(こんなところまで、触手が広がっていた……!)

至近距離から大量の触手に襲われ、一瞬の間に私の身体中に触手が巻き付いた。

「あはっ! 久しぶりにシャーリーちゃんに会えて、触手達も喜んでいてみたいね!」

じゅるじゅると、触手が粘液を擦りつけてくる。私は風の刃を生み出そうと、ステッキを振りかぶったが、その腕にも触手がぎっしりと絡みついた。

「ぐっ、このっ……! まとわりついて、こないでっ!」

私は力を籠め、触手を引きちぎる。

しかし、数本を引き違っている間に、その何倍もの触手が群がってくる。

(こんな、触手なんかにつ……!)

それでも、魔力で強化された体は、触手に自由を奪われるほど、やわではなかった。私は早乙女さんを抱えたまま、触手を少しずつ引きちぎり、苗床の外へと後退していく。

そこへ、

「つぶ、ぐううううううっ!?!」

触手が、私の口の内に飛び込んできた。催眠効果のある触手の粘液が、私の口内に塗り込まれていく。

(しまった……!)

粘液が体内に吸収され、身体の奥が熱くなるのを感じた。幾度となく苗床に入り、触手の粘液を摂取した時のことを、私の身体が覚えているのだ。

脚から力が抜けていく。ステッキと早乙女さんを握る手や、それを支える脚が震え始めた。

(このままじゃ、まずいっ……!)

私に絡みつく触手が増えていき、身体中に粘液を塗り込んでいる。それに伴い、身体に生まれた疼きが増していく。

「どうしたの？ 逃げないの？ どんどん触手が増えちゃってるけど、大丈夫？」

「んぐっ……ぐ、むぐう……じゅりゅっ……んぐう……!」

(こんな、触手なんか、負ける、ものかっ!)

「んぐうううううっ!!」

私はステッキに魔力を籠め、私の周囲に細かい風の刃を無数に出現させた。私に絡みついてた触手のほとんどが切断され、苗床の床に落下していく。

「ぶはあ! ぐっ……はあ、はあ……」

口の中に潜り込んでいた触手も両断され、動きの止まった肉の塊を、私は吐き出す。

(今だ!)

私は跳躍して苗床から脱出しようと試みた。

「残念! 時間切れだよ!」

だが、一歩遅かった。

私の背後、先ほど通ってきた通路が、触手の塊によって塞がれ、壁と化してしまったのだ。

「そんな……!」

これでは、苗床の中から脱出することができない。

「さあ、シャーリーちゃん、どうする？ そのままだと、触手に呑みこまれちゃうよ？」

「ぐっ……!」

私の足が、ずぶずぶと苗床の床、触手の群れの中に沈んでいく。

(身動きが、とれない……!)

「隙だらけだよ、シャーリーちゃん!」

ひゅん! レスターの髪の毛触手が、私に叩きつけられた。

「ぐああっ!」

強烈な一撃が私の体を揺さぶる。その衝撃で、私の手から早乙女さんの体が零れ落ちてしまった。

「ぐうううっ……!」

「ロースちゃん、もーらいつ!」

次の瞬間、早乙女さんの体は、レスターの触手に巻き付かれ、私の傍から引き離されてしまった。レスターは自分の真正面に早乙女さんを移動させると、その裸体に後ろから抱き着く。

「ローズちゃんはもう私のものだから、シャーリーちゃんにはあげないよ！」
「ぐっ！ 返せっ！」

「あはっ！ 大丈夫だよ、シャーリーちゃんも相手してあげるから……これからたっぷりと、ね！」

レスターがそう言い終わるやいなや、私の身体に巻き付いていた触手が離れていく。そして次の瞬間、それらの触手が輩のようにしなり、次々と私の身体に叩きつけられた。

「うがあああっ！ ぐっ、あああああああっ!？」

全方位から襲い掛かる触手の輩。触手を受けた個所に激痛が走った。

「ぐっ、このおとおっ！」

私はステッキを振るい、迫る触手を切り裂く。しかし、切り裂けたのは一部の触手だけで、全方位から襲う触手のすべてを防ぐことはできなかった。

私の身体は触手の攻撃を受け続けている。そして私を襲う触手の数は、時間の経過とともに増え続けていた。足が触手の床に埋め込まれている今、移動して回避することができない。

「ぐ、あぐうう……!! このおっ……ぐあああっ!!」

ダメージが蓄積していく。私が弱っているのを見て、レスターが触手を伸ばし、私が握り締めているステッキに巻き付けた。

（ステッキを、奪わせるものかっ!）

触手はステッキをぐいぐいと引っ張り、私から奪おうとする。私はそれを必死で握り締め、阻止しようとした。しかし、

「ぎっ、ああああああっ！」

ステッキを持つ方の私の腕を、周囲の触手が集中的に叩いた。

ステッキが、私の手の中から滑り落ちた。

「それも、もうらいつ！」

レスターの触手が私のステッキを掬い取る。

「……!!」

（ステッキを、奪われた……!!）

魔力を魔法に変換する機能を持つステッキを失うこと、それはすなわち、魔法が使えなくなることを意味する。

私の敗北が決定した瞬間だった。

「ぐっ……ぐううっ……」

周囲の触手の攻撃が止まる。私を痛めつける必要がなくなったからだ。私は体を支えきれず、触手の床に尻餅をついてしまう。

「あはっ！ ステッキがなくなっちゃ、もう抵抗できないよね！ じゃあ、これから魔力を買っちゃおうよ！ シャーリーちゃんを可愛がるのは久しぶりだから、楽しみ！」

（触手に、犯される……!!）

私はかつて苗床で行われた私への行為を思い出した。

あの時は自ら進んで触手に犯され、魔力を提供していた。思い返すだけでおぞましい行為だ。

今はそのようなことは望んでいない……と、言い切りたいが、触手の粘液を塗りつけら

れた私の身体は、かつての凌辱を思い出し、疼いてしまっている。無意識に、触手を求めている自分がいた。

「普通に犯してもつまらないよね！　じゃあ、こんなはどう？」

「……？」

天井の触手をかき分けて、一瞬太い触手が出現した。その太さたるや、人間の胴体よりも何倍も大きい。

その触手の先端が割れる。内部は空洞になっていた。触手の中に、底知れぬ闇が広がっている。

（まさか、この中に私を……？）

「すぐに快楽を思い出させてあげる！　魔力がなくなるまで、壊れないでね！」

触手が、勢いよく私を飲み込んだ。

「ひっ……!？」

視界が闇に覆われ、生暖かく、ぬめぬめした感覚が全身を包む。巨大な触手は、私の頭から足までを一口で飲み込んでしまったのだ。

ぎゅう、と、触手が私の身体を締め付ける。ステッキを失い、身体機能の強化ができなくなった私は、それを押し返すことはできない。

（息が、できないっ……!）

じゅるじゅるとした粘液まみれの肉壁に押され、酸素を満足に取り入れられない。私は手で肉壁を押し、顔の前に僅かな隙間を作り、かろうじて生命維持に必要な酸素を確保していた。

（触手の感触が全身に……気持ち悪い……）

肉の壁が、身体に擦りつけられる。触手の粘液が染み込んだ魔法少女の衣装が、身体にべったりと張り付く。

「ぐっ……このおっ……」

暗闇の中、密閉された空間で、触手の壁に押しつぶされている恐怖。焦燥感が募っていく。しかし、この状況を打開する手段は、私には残されていない。

「ひっ……!？」 内側に、触手が生えて……身体にっ……くうううっ!？」

私を飲み込んだ触手の内側から、無数の細い触手が生え、私に群がり始めた。頬に、胸に、お腹に、手足に、細い触手の先端が触れ、撫でまわす。

暗闇の中、全身が触手に愛撫されている。このような状況にも関わらず、私の身体はそくそくと快感に震えていた。

「んっ……こんなところで、感じるなんて、ダメ、なのにっ……なんとかして、ここから、出ないと……んんっ……!」

ぐじゅぐじゅと、触手が身体中を這いまわる音が聞こえる。触手がブラジャーやショーツの内側にも入り込み、性感帯を直接刺激し始めた。

「あっ、く、あ、ああ……そこ、ダメえええ……んあっ、大事なところ、くにくにつて……んあああ……!」

身体の奥が、火が付いたように熱い。

かつて長期間苗床に入っていた影響で、私の身体は、わずかな刺激に対しても過敏に反応するようになっていた。

「あっ、んっ、あ、んんっ……！ ひうっ、あ、く、んああ……！ 感じちゃ、ダメなのに……感じることに慣れすぎて、我慢、できないっ……！」

ぐじゅぐじゅぐじゅ……じゅるじゅるじゅる……

触手が身体中を這いまわっている。快感は時間の経過とともに増えていき、身体が小刻みに震える頻度も増えていく。

私が快感を享受しそうになっていた時、こっん、と、何かがショーツ越しに股の間をついた。

「ああっ……！」

両脚の間をかきわけて股間に到達したのは、1本の触手。私の全身を愛撫している細い触手とは違う、硬く太い触手だ。

その触手が何のために現れたのか。考えるまでもないことだった。

「それは、ううっ……それを入れられたら、もう、抵抗できなく……んあああああああああっ!!」

すぽお！

ショーツを横に押し退けて、触手が膣内に深々と突き刺さった。

「ぐっ、んひっ……ああっ……奥まで、届いて……ああっ!? んっ、あっ、じゅぽじゅぽ、動いたら……んあああああっ！」

じゅっぶ！ じゅっぶ！ じゅっぶ！

膣内の触手が上下に移動を開始する。触手が勢いよく膣壁を擦り、大量の快感を生み出していく。

肉の壁の中で身動きを封じられている今、触手の抽送を防ぐことは不可能だった。

（中で、触手が、暴れまわって……これ、気持ち、よすぎる……！）

私にとって、膣内への挿入は久方ぶりのことだった。身体はこれを見待ち望んでいたと言わんばかりに、ソクソクと震えている。

その事実が、私に一つの答えをつきつけていた。

（私、こんなに感じちゃってる……！ 私はもう、快感を求める淫乱になってるんだ……やっぱり、もう元には戻れないんだ……）

「んあっ、う、あっ、あ、んっ、くうう……あっ、あ、ああっ……！」

（ダメっ……快感に、流されちゃ、ダメえっ……！ 私がここで諦めたら、誰が早乙女さんを助け出すの……？ 絶対に、ここから、脱出しないと……）

頭から飲み込まれたのであれば、出口は足の下の方にある。なんとか内部を滑るよう移動し、外にでなければならぬ。

じゅこっ！ じゅこっ！ じゅこっ！

しかし、今の非力な私が外に出ようとする動きよりも、膣内を往復する触手の突き上げの方が激しく、さらに奥へと飲み込まれているように感じられた。

触手の抽送による快感がさらに私の力を奪い、抵抗しようとする意志を刈り取っていく。

「んっ、あっ、激し、んんっ！ あううっ……気持ちいいところ、当たって……んんっ……！」

苗床の触手には、私の身体の弱点を知りつくされている。触手は的確に私の敏感な箇所を責め、快感を積み上げていく。

「あうっ、んっ、あっ、ダメっ……これ以上されたら……ああっ、んっ、あ、あ、ああっ！ダメ、ダメ……ダメええっ……！」

絶頂が、すぐそこまで迫っていた。触手は私の状態が分かるのか、ラストスパートとばかりに抽送を加速させる。

「んんっ！ あっ！ んっ！ いやっ、あっ、あああっ……！ んっ、あっ、んんっ！ああ……イっ、ちやう……イくっ……んんっ、イくっ、イ、くう……あああっ！ イくうううううううっ！！」

快感が、全身を駆け抜けた。

触手に絶頂させられたというのに、私の身体は幸福感を覚えている。思考力や抵抗力が根こそぎ失われていくのが分かった。身体を包む肉壁の熱から、温かみを感じてしまっている。

そして次の瞬間、挿入されている触手に吸い取られるようにして、魔力が奪われていく。

しかし、奪われた量は体内にある魔力のほんの一部だ。

魔力がなくなるまで凌辱は終わらない。それを身に染みて分かっている私は、触手による責めがまだ始まったばかりであることを悟っていた。

「んあっ、く、うああ……あっ、ううう……」

肉壁に包まれた身体がびくびくと痙攣している。

絶頂直後、触手はわずかな間だけ責めを停止していたが、すぐにまた抽送を始める。全身への細い触手による愛撫も再開された。

「あうっ、まだ、動いて……る、んんっ、あ、あうっ、また、気持ち、よく、んんああっ……あっ、あっ、あ、んあああああ……！」

じゅるじゅるじゅるじゅる……

じゅっぶ！ じゅっぶ！ じゅっぶ！ じゅっぶ！

暗闇の中、私を責める触手の音が響き続けている。特に膣内からは、触手の粘液と私の愛液が掻き混ぜられる音が、一際大きく聞こえていた。

「んんっ！ ダメっ！ どんどん、激しくなって……ああ、乳首、抓っちゃ、いやああ……ひうっ！ クリトリスにも、触手が……んっ、ふあああああっ！」

ありとあらゆる性感帯を同時に責められ、私は悶えた。湧き上がる快感がどんどん強くなり、私を翻弄する。

そしてまた、絶頂を迎えた。

「んっ！ いっ！ ああああっ！ んあっ、あ、ぐっ、んんんっ！ ダメっ！ またイク……んっ、ああああああっ！！ イくっ……んあああああああああっ！！」

私の身体が大きく跳ね、肉の壁を揺らした。全身を締め付けられながらの絶頂は、快感がずっと体内で反響されるように感じられる。

気持ちいい。私はその感情だけを繰り返し味わっていた。

魔力が触手に吸収されている。

ぶしゃああああ！！

それは不意打ちだった。絶頂の余韻に包まれていた私を、触手の精液が襲った。

膣内に挿入されていた触手だけではない。全身を愛撫する無数の触手が、同時に精を放ったのだ。

「うぶっ！ がっ！ んああああああああっ！！ 熱い、熱い！！」
頭の先からつま先までまんべんなく、白濁液が浴びせられた。熱を帯びた触手の精液を受け、身体が溶けるような、そんな感覚に襲われる。体温が、一気に上昇していくのを感じた。

（精液が、こんなにたくさん……！ 精液に埋め尽くされて、私、溺れちゃう……！）
大量の精液が私と肉壁の間を埋め尽くし、僅かな酸素を奪っていく。私は必死で顔の前の空間を押し広げて、わずかにできた空間で呼吸を行う。

「うくっ、んっ、ぶぐう……んっ、ぐう……がはっ……はあ、はあ……」

（殺される……精液に沈められて、殺されてしまう……）
恐怖に震える私を、触手は再び犯し始めた。じゅぶじゅぶと、さらに激しく抽送を行って来る。

「ああああっ……もう、やめてえ……あっ、んっ！ あっ、また、激し、いつ、んっ！ あっ！ ああああっ！！ ダメっ……ダメええええええっ！！」

触手の精液により高揚した身体は、ますます敏感になっていた。

（快感に、抗えない……触手にされるがままになって……まだ、イっちゃう……！ 魔力を奪われちゃうのに……何回もイっちゃうよお……！）

「あっ！ んっ、あああああっ！！ 奥ダメっ……ぐりぐりされて……んあっ、ダメっ！ あっ、イクっ！ まだイクっ！ イくのおおおおおっ！！」

3度目の絶頂。絶頂するたびに、快感が増えていた。身体の痙攣も強くなっていく。

「あ……がはっ……あ、んっ……あ、ああ……」

私はその後も、触手によって魔力を奪われ続けた。



じゅぐっ！ じゅぐっ！ じゅぐっ！
触手が激しく膣内を穿つ。

「んあっ！ ぐっ、あっ、ああああっ……！ んっ……いつ、ぎっ、んああああっ、あっ、ああ……！ まだ……くりゅっ……大きいの、くるうううっ……！ いやっ、いやああああっ！！ あっ、んあっ……！ イ……イクっ……イ——うああああああっ！！」
絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

じゅっぽ！ じゅっぽ！ じゅっぽ！

触手が口内にも挿入され、上下から私を犯す。

「んぐっ！ ぶりゅううっ！ んむっ、じゅりゅれりいゅうっ！！ んっ！！ んぐ、むじゅぐっ、んっ、んっ、んんっ！！ っぶ……ぐ、れう……むぐ、こっ、ぐこおおっ……！ んぐっ！ んっ！ んぐあう！ ひゅぐっ！ んんっ！ ひゅっじゅう！！ んんっ！ んっ、んぐううううううううっ！！」
絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

ぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ……

触手が胸やクリトリスを重点的に愛撫する。

「んぐっ、ぐっ、ひぐっ、むぐ、れうっ、んっ、んぐっ、んんっ……っばあ！ はあ、はあ……もう、いっぶぶう！ んぐっ！ んじゅりゅれう！ んんっ！ んっ、んぐっ、ぐぐむう、んっ、じゅぐっ、むぐぐう、んっ、ひやめっ……れうっ、ひゅぐ……んっ——んんんんっ！！ むぎゅうううううううっ！！」
絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

ぶじゃあああああああっ！！

触手の精液が膣内や口内にぶちまけられ、全身に降り注いだ。

「ぶりゅうううううううっ！！ うがあああっ！ あっ、まだ、出てるうううう……！ あっひい……あっ、あああああああっ!? ダメっ……きちゃう……触手にせーえき出されて……身体熱くなって……あっ、イクっ……イっちゃうっ……イっちゃうよおおっ……うあああああああああっ！！」
絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

絶頂した私は触手に魔力を奪われた。

絶頂した私は——

（ダメ……いきすぎて、何も、考えられない……気持ちいい……早乙女さん、ごめんなさい……私、もう……）

魔力がどんどん減っていく。しかし、私の体内にはまだ魔力が残っている。触手による凌辱は終わらない……

26

「たあああああっ!!」

飛びかかってきたバイオ兵を、私は剣に形状変化させたステッキで切り伏せる。

（形状変化、『w』!）

その直後、ステッキを弓の形状に変化させ、魔力の矢を放つ。距離を詰めてきていたバイオ兵に命中し、その巨体を光に変える。

矢を数本放ち、矢と同じ数のバイオ兵を倒した後、ステッキの形状を剣に戻す。距離を詰めていたバイオ兵に剣を振るう。

複数の形状変化を瞬時に切り替える戦術で、私は魔力を浪費せずに、次々とバイオ兵を倒していた。

（あと、何体……?）

バイオ兵は、倒しても倒しても、私たちが入ってきた通路から出現し、その数を中々減らさなかったが、ここしばらくの間は新たな個体は出現していない。

（打ち止めになったか……? 増えないうちに倒し切る!）

私はここまで、背後の通路を塞ぐように立ち回っていたが、敵の数が少なくなったことを受け、移動を開始する。

周囲を取り囲んでいるバイオ兵の懐に飛び込み、至近距離から剣を叩きつける。敵は私のスピードに対応することができない。今まで以上の速さで敵の数を減らしていく。

（こいつで、最後っ!）

「はああああああっ!」

魔力の刃が黒い怪人を真っ二つに切り裂く。

「オオオオオオ!」

断末魔の叫びを上げながら、最後のバイオ兵が消滅した。

この空間に残っているのは私とルカンダだけだ。

「ルカンダ、次はお前が戦うのか? 一対一で戦うというのなら、今度こそその命、私もらうぞ!」

「……ほんと、デタラメに強いわね、あなたは」

「時間稼ぎの会話に付き合うつもりはない!」

私は剣の先をルカンダに向けながら、頭の中で、飛行しているルカンダを攻撃するために効果的な方法を検証していた。

「大丈夫よ。時間稼ぎは済んだから」

「……!」

ルカンダは不敵に笑いながら、指を頭上に掲げて見せる。

（ルカンダの指に魔力が集中している……？ これは……！）

「まさか……時間停止か!？」

「ふふふ、そうよ！ 私がこの指を鳴らせば、あなたの時間は停止するわ。あなたがその位置から私を攻撃するのが早いか、私が指を鳴らすのが早いか、試してみる？」

「……」

ルカンダの言うことが本場で、既に時間停止の準備が整っているのであれば、この距離を詰めるより早く、指を鳴らされてしまうだろう。

「アルフェリカ、あなたに刻んだ紋様には、あなたの位置情報を把握する機能があるの。あとは、時間停止の魔法を詠唱する時間を稼ぐだけ。パイオ兵は全部倒されちゃったけど、十分その役目を果たしてくれたわ」

「く……」

（形状変化、『M』！）

なにもせずに諦めるわけにはいかなかった。私はこの距離からでも攻撃できる武器に、ステッキの形状を変化させる。

だが、形状変化の途中で、

「じゃあね、アルフェリカ。次の瞬間、あなたがどうなっているのか、楽しみにしておいてね」

『パチン』

と、指が鳴らされた。

27

意識が断絶したのは、ほんの一瞬、刹那の間だった。

しかしその一瞬で、私の置かれている状況は一変していた。

「ここは、っ……!」

私が立っていたのは、先ほどまでの空間ではなかった。石造りの床と壁に囲まれた薄暗い空間。辺りには重苦しい空気が漂っている。

（ステッキがない……）

ステッキを握っていたはずの左手は、何も掴んでいなかった。時間を止められている間に、ステッキを奪われてしまったのだ。

（この空気、覚えがある……）

しばらく前にも感じたことのある悪寒。そう、あれは、アーク・デュランの古城で、魔王と対峙した時のものだ。

「ここに、アーク・デュランがいる!？」

私は周囲を警戒するように見回した。しかし、私の世界を混乱に陥れた触手の魔王の姿はどこにもない。部屋の中央に、石造りの玉座が置かれているのみだ。

びちゃん。

その時だった。頭上から何か液体のようなものが垂れ落ちてきて、私の肩を叩いた。

「……!？」

私は反射的に頭上を見上げる。

(天井に、何かいる……!)

薄暗い天井を蠢く物体。それが触手の群れだと気づいたのは、天井から複数の触手が私に向かって飛びかかってきた後だった。

「くっく!!」

回避できたのは最初の1本だけだった。次々と飛来する触手が、私の身体に巻き付いていく。

「ぐっ、放せっ……ぐううっ!」

ぎりぎり、複数の触手が私の身体を締め付ける。ステッキがなく、身体機能を強化することができない私は。その触手を引きちぎることができなかった。締め付けられる痛みを顔をしかめながら、うめき声を漏らす。

「久しいな、アルフェリカ。1人でこちらの世界にやってきたのか？」

触手と触手の振動によって作られた重苦しい音声。聞き覚えのある、忘れてくても忘れられない声だ。

「アーク・デュラン!」

天井を埋め尽くす触手の群れは、触手生命体、魔王アーク・デュランだった。気配を感じてはいたのに、姿を捉えるのが遅れ、奇襲を許してしまった。

「お前たちによって、私の肉体は大きく損傷したが、今はこのとおり、従来を取り戻した」

「くっ……この世界の住人から魔力を奪って、回復するなんて!」

「この世界の住人というより、新たに生まれた魔法少女の魔力による部分が大きいな。プリズム・シャリー。あの小娘のおかげで、私は復活できたのだ」

「シャリーや多くの人を犯して……許さない!」

「許さないか。ではどうする？ 私を倒すか？ 魔法のステッキを持たぬお前に、私を倒せるか？」

「ぐっ、このおっ……! がっ、ぐうううっ!」

アーク・デュランがさらに強く私を締め付ける。粘液まみれの触手が衣装や肌に食い込み、私の身体が軋む。

「その様で私を倒すなどと、よく言えたものだ。アルフェリカよ。お前には一度消滅させられかけた恨みがある。私自ら、お前の魔力を奪ってやろう」

「そんなこと、させる、ものかっ……うっ!? くあああああっ!!」

触手が私の身体を持ち上げ、勢いよく横に移動させる。私の身体は、部屋の中央にある石の玉座の上に、叩きつけるようにして乗せられた。

「ぐっ……!」

私は椅子の上に乗っていたが、椅子従来の使い方である、座る、という姿勢になっているわけではなかった。

私は頭を逆さまにした、上下逆の姿勢を、玉座の上でとらされていた。本来お尻が乗るべきところに背中を乗せ、背中をもたれかける部分にお尻を接している。

「なんの、つもり、ぐっ……放せっ……!」

不安定な姿勢の私に、触手が次々とまきついていく。椅子と私の身体を束ねるようにして触手が巻き付いたため、私は逆さまに椅子に乘せられたまま、身動きがとれなくなってしまう。

脚は大きく開かれ、頭上を向いている股間を隠すものは何もない。スカートがお腹側に垂れ落ち、黒い下着が露わになっていた。

「こんな、姿勢で……何を、するつもりだっ……!」

「お前の魔力を奪うと言ったはずだ。既にルカنداによって性感を高められているような。あっさり快楽に屈されては楽しみがない。せいぜい耐えてくれよ」

ビリッ!

触手によって私の下着が引き裂かれ、局部がむき出しになった。

「うああっ!? ……ひっ……それは……!」

私の目に映ったのは、天井から私の股間に向け、一直線に降りて来た1本の触手だった。その形状はともかく口で、表面に不規則な突起が付いている。そしてその太さは、人間のペニスと比べて一回りも二回りも肥大だった。

「それで、私を、犯すのか……?」

「そのとおりだ。では、いくぞ」

アーク・デュランはそれ以上語らず、触手を勢いよく下降させた。触手の先端が膣口に押し入り、膣の奥底まで突き刺さる。

「ひぎゅうひいひいっ!! んっ!! ぐああああああああああっ!!」

すちゅうううっ!!

あまりの勢いに、結合部から触手の粘液が飛び散り、身体中を濡らした。同時に、悲鳴を上げた私の口からも唾液が飛び散り、粘液とぶつかって弾ける。

「が、あ……ああ……ぐううう……!」

(太いものが、奥まで……苦しい……お腹が、裂けてしまう……!)

触手により内臓が圧迫され、呼吸が阻害される。異物の挿入で全身が硬直し、私は痙攣したように指先を振るわせた。

そんな状態の私を、触手は容赦なく責め始めた。垂直に触手を引き抜き、また降ろす。シンプルな動きの抽送だが、それにより、おぞましいほどの刺激が私を襲った。

「ひぐっ! んあぐうううっ!! んっ! がああっ!! んああああああああっ!!」

じゅぞぞっ! じゅぞぞっ! じゅぞぞっ!

触手が抜かれるか突き入れられるかするたびに、私の口から悲鳴が漏れる。

凶悪な太さの触手でも、触手が帯びる粘液と、表面がぬるぬるしているせいで、抵抗なく私の膣内を出入りしていた。

突起のついた触手が私の膣壁を擦り、削り、抉る……快感が、生まれた。

「んひうううっ! ぐっ! あっ! んああああっ!? ぐっ、ダメ……:がああああっ!

激し、いいいいっ……!」

「もう声色が変わったか、感じているな、アルフェリカ」

「ば、馬鹿なっ……:こんな触手で、っ……:んっ……:感じる、ものかっ……:あっ、んっ、んんん——っ!」

ルカنداの紋様により性感を100倍に高められている身体は、このような極悪な触手

の責めでさえ、快感を感じるようになっていた。

じゅるじゅると、瞬く間に愛液が分泌され、触手によってぐちゃぐちゃにかき混ぜられる。それが抽送により、触手の粘液と共に周囲にまきちらされていった。

私の身体が、透明な液体でどんどん濡れていく。

「んあっ！ ぐっ！ んあああああ、あっ、あがあああああっ！ どんどん、速くなって……んぎっ！ もう、やめろおおっ……！」

「お前が感じているから速度を上げたまでだ。やめてほしければ快感を抑え込んでみせろ」

「ぐっ、ううう……こんな、触手なんか……あああ……！ 感じたりなど……んっ、ぐ、ううう……！」

目の前には、仲間たちに打倒を誓った宿敵がいる。しかし、私はその相手に犯され、快感を与えられていた。

私の瞳から、悔しさに涙が溢れた。

「膣ばかりでは刺激が足りぬか。ならば胸だ」

「ひっ……！ やめろおおっ……！」

ヒリヒリ！ 触手が胸に迫り、インナーと胸袋を引き裂いていく。私の両の乳房が露出するまで、さほど時間はかからなかった。

そして、露出した乳房に向けて天井から降りて来たのは、先端が細かく分岐している触手が2本。それが、私の胸にしゃぶりつくようにして飛びついてきた。

「んひいいいいいっ！！」

じゅるじゅるじゅる……細かい触手がそれぞれ独立した動きで私の乳房を、乳首を責め立てる。乱暴な膣への抽送とは違い、優しく柔らかな愛撫に、ぞくぞくとした快感が溢れ、背中を震わせた。

「んあうう……あっ！ ぐっ……あ、ああっ、んあっ、あ、あああああ……！」

（胸からの快感が、止められない……！ こんな触手に責められて、こんなに感じるなんて……！）

じゅっぶ！ じゅっぶ！ じゅっぶ！

膣内と胸を同時に責められ、快感が爆発的に高まっていった。

「ぐっ、あああああ、あっ、んあっ……ダメ、っ……あ、んあああああ……んっ、きゅうううっ……！」

触手による快感が身体中を駆け巡り、徐々に抵抗しようという意思が奪われていく。

そしてさらに、複数の触手が私に忍び寄り、肌を愛撫し始めた。

「あっ……んんっ……いっぺんに、撫でるなあっ……くああっ、んあっ、あ、あああああ、つあああああ……」

「この全身愛撫にどこまで耐えられるかな？」

「ぐっ、こんな、もの……こんな、こんな……あああああ……」

（ダメ、こんなの、耐えられない……身体が疼いて、どうしようもない……！）

1本の触手が、ひよいとつまみ食いをするように、私のクリトリスに巻き付いた。それがトドメだった。

「あううううううっ！！ ダメっ、ダメ、ダメええええええええっ！！ イくっ！ イくうううううううううっ！！」

膨大な快感が、身体の中を行き来している。私は長い間絶頂の中にいた。視界と頭の中が真っ白になり、ただ快感だけを味わい続けた。

絶頂により魔力が奪われていたが、今はそれを惜しめるような状態ではない。

「が、ひゅう……んんっ……が、っ……おっ——ご、ぐう……」

どれくらい時間が経ったか私には分からない。意識を取り戻した時には、永延に続くかと思つた絶頂の波は過ぎ去っており、絶頂の余韻によつて全身が弛緩した状態になつてた。

そぶじゅっ！ そぶじゅっ！ そぶじゅっ！

しかし、そんな私を、極太の触手は犯し続けていた。膣内だけではない、胸やクリトリクス、全身を愛撫する触手もまた、その動きを続けている。

間髪入れず、私は快感の中に漬けられていく。

「ぎゅぎゅいっ！ んっ！ ああああああつ！！ やめっ、やめ……やめでえええええつ……！！
んあああああつ！！」

「何度も絶頂させてやる。私に逆らったこと、後悔しても、やめる気はない。女に生まれたこと、魔法少女になったことを後悔しながら、壊れていけ」

「ふあああああつ！　さらに、激しく……んぎつ！　がっ！　がああああああつ！！
壊れるっ！　ごわれるうううううっ！！」

「壊れるまで続けると言った。さあイけ。かつて私を脅かしたもののよ。快楽に狂え」

「いやっ！ あああああっ！！ ひぐう！！ また、イぐううううっ！ いやっ、いやっ
いやああああっ！ んんっ！！ んんああああああああっ！！」

再び快感の大波が私を飲み込んだ。触手に拘束された身体がビクンと大きく跳ね、石造りの玉座を揺らす。

「あ——あつ……くあ——んつ……あああ……」

絶頂の余韻により再び私から力が抜ける。

「では、これを入れてやろう」

そんな私に、追い打ちが放たれた。膣の奥深くまで挿入されていた太い触手が、その先端から液体を噴出させたのだ。

「ぎひいいいいいいいいいいいいいっ!!」

触手による射精。それも大量の。

精液がお腹の中を埋め尽くし、下腹部をぷっくりと膨らませる。

「がっ！ あ!! あああつ!! んがあああつ!!」

お腹の圧迫感が急激に高まる。私のお腹の許容量を超えてもなお射精される白濁液。やがて空気を入れすぎた風船が弾けるように、膣と触手との結合部から、激しく精液が飛び出した。

ぶしやあああああ!!

精液が高く舞上がり、雨のように私に降り注ぐ。魔法少女の衣装が瞬く間に白濁に染まり、既に付着していた粘液に重なって身体中をドロドロに濡らした。



「ごふっ！ んあ……ひぎゅっ……がっ……いやああ……」

「私の精液は氣に入ったか？ では続きだ」

ぐじゅぶっ！ ぐじゅぶっ！ ぐじゅぶっ！

今しがた精液を射出した触手が、抽送を再開した。あれだけの量の精液を放出したというのに、まるで何事もなかったかのように、激しく私の膣内を抉る。

膣内に溜まった精液がかき混ぜられ、ぐちゃぐちゃという卑猥な音が耳に届いた。

「ダメ……もう、ダメええええっ……んっ、ああああああっ、くううっ、んっ、もう、無理いいいっ……」

全身への愛撫も続いている。ただでさえ敏感な身体が、激しい愛撫により、どんどん快感を積み上げていく。

抵抗の心は、既に折れていた。

アーク・デュランへの憎しみも、仲間たちへの申し訳なさも、シャーリーや舞華を案じる気持ちも、どこかへ消えてしまっていた。

強烈な快感を強制的に与え続けられるという拷問。今の私は、その拷問を受け、悲鳴を上げながら身を震わせるだけの、ただの女だ。

絶頂が、近い。

「いやああっ、あっ、あ、んあああっ、がっ、んんんっ！ イくっ！ あっ!? んああああっ！ イくっ！ イくっ、イくくくっ！ ——っ……イべううううううううううっ!!」

びくん！ びびくんっ！

私の身体が、私の意志とは無関係に暴れまわっている。強すぎる快感が脳を焦がし、すきすきと痛みを発していた。

(ああ……気持ち、いい……)

幸福感が全身を包む。魔力を吸われる感覚すら、心地よく感じられた。意識が断続的に途切れる。

私の意識があろうとなかろうと、触手は絶え間なく私を犯し続けた。

じゅぶっ！ じゅぶっ！ じゅぶっ！

「あああああ……！ まだ、激し、ひいひいひい……！ お腹、壊れるううう……んあっ、があああ…… あっ、んくうう……あっ、んっ、あああ、ひあああああっ！ イくっ！ イ——く——うううううう……！ うああああああああっ！！」

ぐじゅぶっ！ ぐじゅぶっ！ ぐじゅぶっ！

「が、ああ……んんっ！ ぐっ、うあううう……！ ダメ……胸もクリトリスも、くにくにしちゃ、ダメえええ……！ あうっ……すっ、と、イって——あっ、あ、んぐっ、はああああ……！ んんんんんんっ！！」

ぞぶぐっ！ ぞぶぐっ！ ぞぶぐっ！

「ひぐっ……あう……んああああ……ぐっ、また、イ、くう——んんっ！ あっ、ああああ、イぐううううう……！」

じゅっぶ！ じゅっぶ！ じゅっぶ！

「あ……う……あっ、あっ、んん……あ——ああ——んあ……あ……イ——く——ああ……！」

ぐっちゅ！ ぐっちゅ！ ぐっちゅ！

「ん……あ……う……あ……あ……ん、あ……ああ——」

すっちゃ！ すっちゃ！ すっちゃ！

「……ひう……あ……ん……ん……」

触手による凌辱は続いている。

私は数えきれないほど絶頂し、ほとんどの魔力を奪われてしまっていた。

脳が快感で満たされ、意識が朦朧としている。今自分の目が覚めているのか、気絶しているのか、それすら分からない。

ぶしゃああああああ！！

勢いよく、私の中で精液がまき散らされた。4度目、いや、5度目だったか。射精された回数すらあいまいだ。

「あ……あああああ……！ ひぎゅあああああああ……！」

精液の熱と腹部の圧迫感により、急速に覚醒を強いられる。
火照った身体に熱い精液が降り注ぎ、私の性感をさらに高めた。

「イクっ！ いやああああっ!! イっじゃうっ!! 触手に出されながら、イクっ、イっ……」
——イぎゅううううううううううううううううううううう!!」

ひと際大きな絶頂の波が巻き起こった。

全身ががくがくと痙攣する。

「——!!……!!——!!」

私は声にならない声を上げながら、口をばくばくと開閉させていた。

身体が重い。絶頂の連続で全身が軋み、悲鳴を上げている。

だが、アーク・デュランは私を休ませる気はないようだった。

じゅぶぐっ! じゅぶぐっ! じゅぶぐっ!

触手は速度を少しも緩めずに私を責め続けている。

「アーク・デュラン様、お呼びでしょうか」

「……?……?」

女の声がした。これは、ルカンダの声だ。

「よく来た。ルカンダよ、お前に頼みがある」

「なんなりとおっしゃってください」

ルカンダが登場したことにより、触手の抽送が停止した。

「アルフェリカを犯すのは、これにて終わりとする」

「……? おわ、り……?」

終わりという言葉。

この快樂地獄という苦しみから早く解放されたい私にとって、とても輝いた言葉だった。

するり、と、触手が膣内から引き抜かれる。同時に、身体中を愛撫していた触手も、私

から離れていった。

心待ちにしていた瞬間だった。

「あうう……はあ、はあ……ぐ、あああ……」

久方ぶりに快感のない状態になった。腹部の圧迫感からも解放され、私は大きく息を吸い込む。

「終わりですか。それで、私に何を命じられるのですか?」

「アルフェリカの時間を止めるのだ」

「……? 私の時間を止める……?」

このタイミングで私の時間を停止して、どうするつもりなのだろうか。耳に入ってきた言葉の意図が分からずに、私は困惑する。

「……それは構いませんが、何をお考えなのですか?」

「今からお前がアルフェリカの時間を止める。その後、苗床に連れていき、触手に犯させ続ける。長時間犯した後、時間停止を解除するのだ。時間停止の間に蓄積された快感により、アルフェリカの精神を破壊させるのだ」

おぞましい命令が下されようとしていた。

そんなことをされたら、今度こそ本当に、私という人格が壊れてしまう。

「分かりました」

ルカンダは命令を承諾し、私の傍までやってきた。
「やめ、ろ……」

ルカンダによる時間停止魔法の詠唱。それを止める手段はない。私は触手に拘束されたまま、ルカンダの詠唱が完了するのを待つことしかできなかった。

やがて詠唱を終えたルカンダは、右手を頭上に掲げる。

「ふふふ。アルフェリカ。こうやってあなたと話せるのは、これが最後ね」

「あ、ああ……や、やめ——」

「じゃあね」

『パチン』

乾いた音が、無慈悲に耳に届いた。

28

じゅぶっ！ ぎゅちゅ！ すじゅっ！ ぐじゅっ！ じゅぶじゅう……ぎゅっ！ す
っ、じゅっ！ ぐぶっ、じゅっく！ じゅっく！ じゅっく！ じゅぶぶ、ぐじゅぶっ！
すすじゅっ！ ぐっ、じゅぶっ、ぞぐっ！

苗床に放り込まれたアルフェリカを、触手の群れが犯し続けている。

隆内、胸、クリトリス、そして全身の肌を、絶え間なく触手は責め続けた。

アルフェリカの中に、快感が蓄積されていく……

そして、長い時間が経過した。

29

するり。

私はゆっくりと触手の外へ吐き出された。

「う……あ……」

私を丸呑みにしていた触手は、ウネウネと震えながら、苗床の天井に戻っていく。

触手の中で犯され続け、私は絶頂を繰り返し、すべての魔力を失った。変身が解除され、

シャーリーの姿から小日向沙織の姿に戻っている。

身体中が触手の粘液と精液に濡れ、早乙女さんから借りている衣服がドロドロになって私の肌に張り付いていた。

「……くっ……早乙女さん、は……？」

ぼんやりとした視点を周囲に彷徨わせ、助けるべき人の姿を探す。

すゅちゅ！ すゅちゅ！ すゅちゅ！

早乙女さんは、触手に犯されていた。ぶよぶよとした触手の壁に手足を埋め込まれながら、隆内に太いモノをねじ込まれている。

しかし、犯されているのは早乙女さんだけではなかった。早乙女さんの横で同じように

触手の壁に拘束されたながら犯されていたのは、

「アルフェリカ……？」

魔法少女の衣装を無残に引き裂かれたアルフェリカがそこにいた。

ジャケットはなく、インナーやスカートは原型がないほどに破れている。

「そんな……」

私を先行させるため、敵の前に立ちふさがったアルフェリカがここに捕らえられているということは、あの後敗北してしまったのだろうか。私が役割を果たし、あの場に戻っていれば、こんなことにはならなかったのに。

ぐったりと身動きしないまま犯され続けている彼女の姿を見て、私はあることに気が付いた。

（時間を、止められている……？）

並んで犯されている早乙女さんとアルフェリカを見比べてみると、早乙女さんは時折身を震わせ、掠れたようなうめき声をあげていたが、アルフェリカはそのような反応を一切見せていない。

ルカンダによる時間停止の魔法。私も一度経験したことがある。そのあまりにも理不尽な効果を受けてしまえば、対象者に成す術はない。

時間を止められたまま犯され続けているということは、彼女の体内に快感が蓄積され、時間停止が解除されたタイミングで一気に襲い掛かってくる。あの快感の暴力は、一瞬間違えば対象者の命を奪うほどに強烈だ。

（はやく、助け、ないと……！）

幸い、周囲にレスターの姿はない。壁に貼り付けられて犯されているアルフェリカと早乙女さんを助けるなら、今しかない。

私はドロドロの身体を触手の床に這わせながら、彼女たちの方に向かう。

……しかし、彼女たちの救出は間に合わなかった。

「あら？ エビルズ・シャーリー、変身が解けているわね。魔力、なくなっちゃったのかしら？」

苗床の門が開き、中に入ってきたのはルカンダだった。彼女は飛行しながら、私のすぐ真上の地点まで移動し、静止する。

「ルカンダ……あなた、アルフェリカの時間を……！」

「そうね。止めているわ。それで、時間を止めながら、かなりの間触手に犯させたから、今解除しにきたわけ」

「そんなことをしたら……！ やめなさい！」

「やめる？ やめてどうするの？ このままずっと、時間を止めたまま犯し続ければいいの？」

「そんなわけないじゃない！」

思わず声を荒げた私を見下ろしながら、ルカンダはくすくすと笑った。

「ふふふ。必死になっちゃって。でも、もう手遅れなのよ。既にアルフェリカの中には快感が蓄積されている。むしろ早く解除してあげた方が、彼女のためなんじゃない？」

「それは……」

「まあ、あなたに何を言われようとも、アーク・デュラン様の命令だから、解除するんだ

そう言いながらルカンは、

と、指を鳴らした。

私ははっとしてアルフェリカの方を見た。

アルフェリカに時間が戻る。彼女は周囲の変化に戸惑うような表情を見せた。

そしてその表情は、徐々に恐怖に歪んでいく。

私には分かる。同時に襲い掛かってくる快感の波の予兆を感じているのだ。まもなく膨大な快感に押しつぶされることが分かっているのに、打つ手はない。

これほどの恐怖があるだろうか。

そして、その時はすぐにやってきた。

「ぎっ！ ひっ！ がっ！ あがあああああああああああつ！！」

アルフェリカは目と口を大きく開きながら絶叫した。壁に拘束された全身ががくがくと上下に痙攣している。

「ひぎい ああああ ああああ ああつ!! いっ! ごおお おお おお おお!!」

あまりに凄惨な光景だった。

彼女の苦しむ様子を近くで見ながら、何もすることができない。

私は耐えきれず、彼女から目をそらした。

30

ルカンドの指の音が聞こえた、次の瞬間には、私は別の場所にいた。

「ろ——あ……？」

視界を埋め尽くすのは、又ル又ルとした触手の壁。私は手足を触手の壁に埋め込まれ身動きができない状態だった。腔内には触手が突き刺さっており、同時に他の性感帯も複数の触手によって責められていた。

「う、あ……？——ひつ、ああ……！」

そして私は気付いた。身体の内底から、何かが弾けようとしていることに。

（何かが、来る……？）

それは地鳴りのように、私の全身に振動を与える。やがて、その凝縮されたエネルギーが、身体の中で炸裂した。

「ぎっ！ ひっ！ がっ！ あがあああああああああああああつ！！」

身体が制御不能に陥った。

全身を何十、何百、何千という規模で行き来する快感の波が、一瞬で私を絶頂へと叩き込んだ。

数えきれないほどの絶頂が、一度に襲い掛かっている。



「ひぎいああああああああっ!! いっ! ごおおおおおおおっ!!」
ぶしゃああ、と、私の股間から愛液が噴き出した。

「イクっ! イっでりゅっ!! イっ、て……あ……あぐうあううううあううあううあううあううっ!!」

人間が耐えられる快感ではなかった。

度を越えた快感は暴力として私を襲った。何十人もの相手に同時に殴られているような苦しみに、身体は痙攣を続けていた。

「ぎゅううううううっ!! いづまでっ! 続くのおおおおおおっ!! もう無理っ!! ぐああああああああっ!! もう、無理iiiiiiiiiiii死ぬっ!! とめてええてええええええっ!! 死んじゃうからあああああああ
あああああっ!!」

毎秒襲い掛かってくる絶頂。

同時に10回くらい絶頂しており、1つの絶頂が終わった瞬間に次の絶頂が来る。そのような状態。絶頂の順番待ち。

頭がどうにかなりそうだった。私は舌をだらしなく垂らして唾液をまき散らしながら、がくがくと頭を揺らした。

私の神経は……もう持ちそうにない。

何度も何度も絶頂し、みるみる身体から魔力が吸い取られていく。最後まで吸い尽くされた私の身体は、魔法少女への変身状態を維持できなくなった。

わずかに残っていた魔法少女の衣装が光と消え、代わりに舞華からもらった衣服が現れる。現れた衣服は、触手の粘液と精液、そして私の唾液や愛液で瞬時に汚れていく。

「ああああああああっ！ いやああああああっ！！ んぎっ！ ひぐっ！ またひぐっ！！ まだイぐうううううっ！ ふああああっ！ んあああああっ！！ あっ！！ あああああっ！！ ——あううう！！ ——んんんんんんんっ！！」

やがて、連続での絶頂に耐えきれず、私の意識は——

「あっ——」

ぶっつりと途切れた。

31

悲鳴が止んだ。

恐る恐る目を開くと、そこにはがっくりと首を垂れ、身動き一つしなくなったアルフェリカの姿があった。

「あ……そんな……アルフェリカ……」

強くて気高い魔法少女の姿は、そこにはない。

だらしなく開かれた口からは唾液の滴る舌がはみ出し、半分開いた瞳は瞳孔が裏返っている。

「いいいきっぶりだったわよ、アルフェリカ。 気を失っただけかしら？ それとも、死んじゃったのかしら？」

痙攣すらしなくなったアルフェリカ。彼女の生死は分からない。

確認するのは、とても怖かった。

「ふふふ。これでアーク・デュラン様に逆らう魔法少女は、3人とも倒した。これでエビルスアークの侵略を止める者は、いなくなったわね」

「くっ……お前たちなんかに、この世界を、渡してだまるものかっ……」

「あら？ まだそんな反抗的なことが言えたのね、エビルズ・シャーリー」

ルカンダは私を見下ろしながら、邪悪な笑みを浮かべた。

「じゃあ、逆らえなくなるまで、この触手に遊んでもらいなさいな」

「……っ！」

私の周囲の床から触手が生え、私の身体に巻き付いてくる。

「やめて……もう、やめて……」

1本の触手が、無造作に私の腔内に捻じ込まれた。

「いやああああああああっ！！」

その後、私は気絶するまで、触手に全身を襲われ続けた。

あとがき

この度は本作品をご購入いただき、誠にありがとうございます。

「魔法少女アルフェリカ」シリーズ。本作はその3話目です。

いよいよ3人目（実は1人目）の魔法少女が登場しました。かつてプリズム・シャーリーとして活躍し、エビルズ・シャーリーに堕ち、今はただのシャーリーとして舞華を救おうとする小日向沙織です。

作中でアルフェリカが言っていましたが、3人の魔法少女が万全の状態揃っていたならば、簡単にエビルズアークを倒せていたことでしょう。しかし、3人は魔法少女になった時期が異なることもあり、単身で立ち向かわなければならず、敵の勢力拡大を許してしまいました。

今回は囚われた舞華を助けるため、アルフェリカとシャーリーが手を組みます。快進撃を行うと思われた彼女たちですが……結果は本編のとおりです。結果的に、3人とも敵に捕らえられてしまう形になりました。

いよいよ次回は最終話です。3人の魔法少女は、この絶望的な状況を打開して、エビルズアークを倒すことができるのでしょうか。最後まで輪姦も触手も全力投入でお届けする予定です。

最後になりますが、挿絵イラストを描いていただいた有魚様に感謝を。どの挿絵も細かいところまで丁寧に描きこんでいており、素敵なポイントを挙げ始めたらきりがありません。今回も大迫力なイラストに仕上げていただいております。

それでは、また何かの作品が皆様の目に留まることを願って、あとがきとさせていただきます。

2020/8/10 端音 乱希

奥付

発行：2020/8/10

小説：端音 乱希 (<https://ci-en.dlsite.com/creator/4576>)

挿絵：有魚 (https://twitter.com/_ariuo) (<https://www.pixiv.net/member.php?id=6289657>)

製作：No Future

連絡先：nofuture.hr@gmail.com

この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

本作品は成人向け作品です。18歳未満の方の購入・閲覧を禁止します。

本作品の全部あるいは一部を転載・配信・送信する行為を禁じます。









